

山梨県韋崎市

伊藤窪第2遺跡

— 埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1991

韋崎市教育委員会
韋崎市遺跡調査会

一 第③図 河川砂と瓦の樹形図



第④図 山梨県内出土瓦の樹形図

【宮ノ前第2遺跡出土瓦の分析データの修正】

前回報告の宮ノ前第2遺跡出土瓦の胎土分析（河西、1991）のクラスター分析において、コンピュータプログラムに誤りがあったことが判明いたしました。ここにお詫び申し上げますとともに、以下に修正項目のみを掲載し訂正いたします。

b. クラスター分析

第③図は甲府盆地河川砂と本遺跡出土瓦とを比較した樹形図である。全体の傾向として本遺跡出土瓦は第三系分布地域や八ヶ岳南麓地域の河川砂とは類似性に乏しい。I群（Nos. 2, 3, 4, 6, 7, 8, 13, 20, 21）、II群（Nos. 14, 17）、およびIII群（Nos. 18, 19）は釜無川・笛吹川・荒川河川砂と同一のクラスターを形成している。しかし重川を除く笛吹川流域の大部分の河川砂はきわめてまとまりが良好で単独のクラスターを形成している。したがってI～III群の瓦試料は主として釜無川と荒川流域河川砂との類似性が高いといえる。IV群（Nos. 1, 10）、V群（Nos. 5, 9, 11, 12, 16）は同一のクラスターを形成しているが、河川砂試料との直接的な融合は見られない。VI群のNo15は、荒川支流賀川の河川砂と類似性を示す。

第④図は、一宮町甲斐国分寺遺跡、甲府市川田遺跡・上土器遺跡、および敷島町天狗沢遺跡での出土瓦と比較した樹形図である。本遺跡の瓦は、甲斐国分寺・川田・上土器遺跡の瓦とは類似性が低い。天狗沢遺跡とは前の3遺跡よりも類似性が若干あるものの個々に類似性がきわめて高い試料があるわけではない。また本遺跡出土瓦の個体間の類似性が他遺跡ほど高くないことから、瓦胎土が多様性に富むことが本遺跡の特徴としてあげられる。

6. 産地の推定

折れ線グラフによる分類とクラスター分析での分類とが比較的対応することが分かる。なお塩川流域は複雑な地質にもかかわらず河川砂の分析例が須玉町郷戸地遺跡より下流に限られている。これより上流の塩川の河川砂は、周辺に分布する花崗岩類・安山岩・デイサイト・泥岩・砂岩などから主に構成されていると考えられる。

甲府盆地でのデイサイト分布の中心は黒富士火山を中心とする塩川・荒川地域である。したがってデイサイトがふつうに含まれるII～VI群のNos. 1, 5, 9, 10, 11, 12, 14, 15, 16, 17, 18, 19は、塩川・荒川地域との関連性が強いと推定される。また第④図において本遺跡瓦は、荒川地域段丘堆植物を原材料として使用していた可能性が指摘される天狗沢遺跡瓦と類似性が示されている。IV・V群は、直接塩川・荒川の河川砂とクラスターが融合しているわけではないが、他地域と比較するとより塩川・荒川地域と類似性があると推定される。またVI群（No15）は荒川河川砂と類似性が高いことから、荒川地域が産地に推定されるが、塩川上流域の可能性も考えられる。隣接した塩川・荒川地域のなかでさらに産地を限定するのは現段階では困難であるが、IV～VI群の瓦は在地的とみなせる。

I・II・III群の瓦試料は、第③図において釜無川および荒川地域の河川砂と類似性が高いことから、釜無川・荒川流域を中心に塩川上流域を含めて産地に推定される。なお本遺跡は釜無川・荒川地域と隣接しているため、これらの瓦の移動距離をあまり大きく推定しなくてよい。

8. まとめ

本遺跡出土瓦を岩石学的手法で分析した岩石組成に基づき折れ線グラフ・クラスター分析によって分類した。その結果IV～VI群の瓦は塩川・荒川地域に、I～III群の瓦は釜無川・荒川・塩川地域に産地が推定された。また他遺跡出土瓦と比較して胎土の岩石組成の多様性が認められた。これは周辺地質の複雑さからくる原料の多様性によるものか、あるいは複数の異なる産地から供給されたことによるものかまだ明らかでない。今後、遺跡周辺特に塩川流域の地質データの充実により産地の精度を向上させ、考古学的事実をふまえ瓦産地と本遺跡との関係について検討していく必要がある。

山梨県韋崎市

伊藤窪第2遺跡

— 埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1991

韋崎市教育委員会
韋崎市遺跡調査会

序

本書は、莊崎市穴山町伊藤塙地内における市道5号線建設にともなう、伊藤塙第2遺跡の発掘調査報告書であります。

遺跡の所在する穴山町は、武田氏の親族穴山氏が拠ったところで、後世武田勝頼の新府遷都にともない家臣団が集住したとされる地域であります。能見城防壁は新府城を防衛する外郭として認識され、他に類例のない遺構となっております。また、旧穴山小学校周辺は縄文時代の遺跡として周知され、県道拡幅によって最近調査された宿尻遺跡からは、縄文時代中期の遺構と遺物が検出されております。

このように歴史的由緒のある地域において発掘調査がおこなわれ、縄文時代・古墳時代・中世の貴重な資料が得られたことは、地域史を解明するうえで意義のあるものと言えます。本報告書によって先人の生活文化を理解し、遺跡を共通の文化遺産として永く後世に伝えていくことが出来れば望外の喜びです。

最後に、今回の調査並びに報告書作成にあたり、関係諸機関・諸氏の暖かい御理解と御協力に深く感謝申し上げる次第です。

平成3年10月31日

莊崎市教育委員会

教育長 功刀幸丸

莊崎市遺跡調査会

会長 内藤 登

例　　言

- 1 本書は、市道（穴山）5号線建設事業に伴い平成2年度に発掘調査された伊藤塙第2遺跡の報告である。
- 2 発掘調査並びに整理作業及び本報告書の作成は、垂崎市の委託を受け垂崎市遺跡調査会が実施した。
- 3 出土遺物の胎土分析は、山梨文化財研究所の河西学氏による。
- 4 凡　例
 - ① 遺構断面図の水系標高（m）は、数字で示した。
 - ② 掘図中のドットは焼土をあらわす。
 - ③ 掘図断面図の は石をあらわす。
 - ④ 縮尺は各掘図ごとに示した。
 - ⑤ 歴史時代土器断面、白ぬきは土師器、黒は須恵器、網点は陶器をあらわす。
- 5 発掘調査及び報告書作成に当たり、多くの方々から御指導・御助言・御協力をいただいた。一々御芳名を上げることは避けるが、厚く御礼を申し上げる次第である。
- 6 発掘調査、整理によって出土並びに作成された遺物及び資料は、垂崎市教育委員会において保管している。

発掘調査組織

- 1 調査主体　垂崎市遺跡調査会
- 2 調査担当　山下孝司
- 3 調査参加者
石合ふきゑ・石合梅次・小林ささえ・小林義広・宮沢愛夫・細窪文豊・秋山辰蔵・守屋はるの・野村すみ子・石合理重・秋山花子・石合まつ子・伊藤み代・五味ゆき子
- 4 事務局（垂崎市教育委員会社会教育課）
教育長　功刀幸丸、課長　中島尚武、課長補佐　深谷卓・眞壁静夫（前任者）、係長　深沢義文・横森淳彦・雨宮智子

目 次

序

例 言
目 次
挿 図・表目次
写真図版目次

I 調査に至る経緯と概要	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 遺跡の地相概観	3
IV 調査の方法	3
V 遺構と遺物	4
VI 伊藤塙第2遺跡出土土器の胎土分析	22
VII ま と め	35

写 真 図 版

挿図・表目次

第1図	伊藤塗第2遺跡①と周辺の遺跡	2
第2図	伊藤塗第2遺跡位置図	3
第3図	1号住居址平・断面図	4
第4図	1号住居址出土遺物	5
第5図	2号住居址出土遺物	6
第6図	2号住居址、3号地下式土壙、1号溝状造構平・断面図	7
第7図	1号土坑、1号地下式土壙、2号地下式土壙平・断面図	8
第8図	1号地下式土壙、2号地下式土壙断面図	9
第9図	2号地下式土壙出土遺物	10
第10図	3号地下式土壙断面図	10
第11図	3号地下式土壙出土遺物	11
第12図	ピット群平・断面図	12
第13図	遺構外出土遺物	13
第14図	遺構外出土遺物	14
第15図	遺構外出土遺物	15
第16図	遺構外出土遺物	16
第17図	遺構外出土遺物	17
第18図	遺構外出土遺物	18
第19図	遺構外出土遺物	20
第20図	遺構外出土遺物	21
第21図	分析試料の拓影図	24
第22図	伊藤塗第2遺跡出土土器の岩石鉱物組成	26
第23図	岩石組成折れ線グラフ	28
第24図	伊藤塗第2遺跡上器と河川砂の樹形図	29
第25図	伊藤塗第2遺跡および周辺縄文遺跡出土土器の樹形図	30
第26図	伊藤塗第2遺跡土器と山梨県内出土瓦の樹形図	30
第27図	伊藤塗第2遺跡全体図	37
第1表	試料表	23
第2表	伊藤塗第2遺跡出土土器の岩石鉱物	25

写 真 図 版 目 次

- 図版1 遺跡近景・排土作業
- 図版2 発掘風景・調査風景
- 図版3 1号住居址・1号住居址遺物出土状態
- 図版4 2号住居址・2号住居址遺物出土状態
- 図版5 1号土坑・1号地下式土壤入口部
- 図版6 1号地下式土壤豊坑中段部分・2号地下式土壤
- 図版7 3号地下式土壤豊坑中段部分・3号地下式土壤奥壁
- 図版8 ピット群・1号溝状遺構
- 図版9 1号住居址出土遺物・2号住居址出土遺物・3号地下式土壤出土遺物
- 図版10 遺構外出土遺物

I 調査に至る経緯と概要

市道（穴山）5号線建設事業実施にともない、韮崎市教育委員会では韮崎市から依頼を受け、事業予定地区を平成2年10月15日に試掘調査を行い遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、市・韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会で協議を行い、遺跡名を伊藤塙第2遺跡とし、工事に先立って面積約700m²を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

発掘調査は、平成2年12月19日より開始し、平成3年1月16日まで行った。遺物の洗浄・整理作業・報告書作成は平成3年度に行った。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

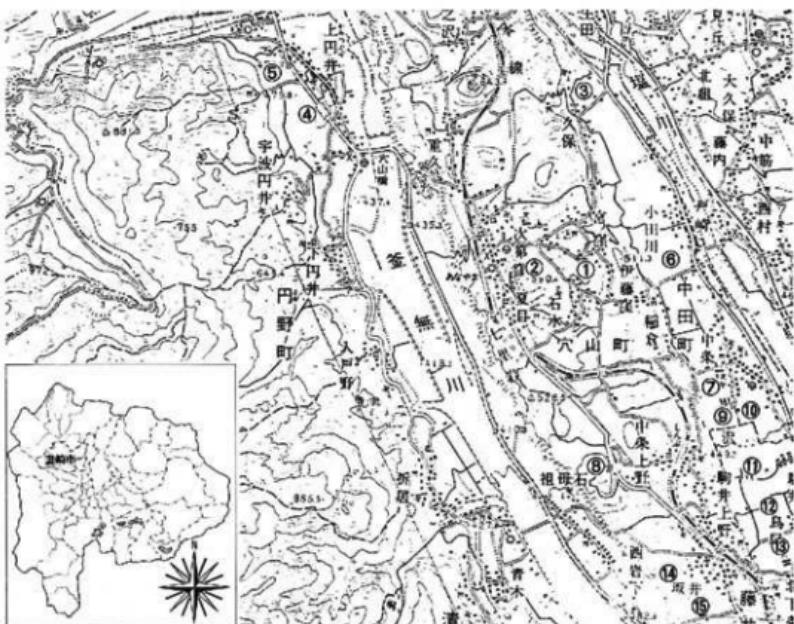
伊藤塙第2遺跡は、山梨県韮崎市穴山町字伊藤久保地内に所在した。遺跡台帳に載る伊藤塙第2遺跡の周辺南側に位置するため同名を遺跡名とした。

韮崎市は、山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的には山地・台地・平地の三地域に分けられる。甲府盆地に楔を打ち込んだような七里岩は、韮崎岩屑流が塩川及び釜無川の侵食等によって形成された台地で、とくに釜無川左岸は侵食作用に因って比高差40~150mの断崖がつくられ、長野県葛木まで30kmあまりにわたって奇観を呈しており、七里岩の名のおこりとなっている。七里岩台地上は岩屑流により小円頂丘と窪地が所々に生じた流れ山地形となっており、上部をローム層が被覆している。流れ山地形にともなう窪地は所によって湧水地・湿地となっており、周辺の丘などに遺跡が分布する。穴山付近は流れ山地形が顕著であり、能見城は小円頂丘を利用してつくられており、伊藤塙第2遺跡も小丘上につくられた標高501m程の畠下に所在した。

2 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代区分	備考
①	伊藤塙第2遺跡	縄文・古墳・中世	平成2年度 韮崎市遺跡調査会調査
②	能見城	中世城郭	
③	上本田遺跡	縄文・平安	平成3年度 韮崎市教育委員会調査
④	堂地遺跡	縄文	
⑤	北堂地遺跡	縄文・平安・中世・近世	平成2年度 韮崎市教育委員会調査

番号	遺跡名	時代区分	備考
⑥	中道遺跡	縄文晚期・平安	昭和60年度 菲崎市教育委員会調査
⑦	中田小学校遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 菲崎市教育委員会調査
⑧	新府城跡	中世城郭	国指定史跡
⑨	金山遺跡	中世～近世	昭和60年度 菲崎市教育委員会調査
⑩	前田遺跡	平安	昭和62年度 菲崎市教育委員会調査
⑪	宮ノ前第2遺跡	奈良・平安	平成2年度 菲崎市教育委員会調査
⑫	宮ノ前遺跡	縄文・平安	昭和63年度～平成2年度 菲崎市遺跡調査会調査
⑬	後田遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	昭和63年度 菲崎市教育委員会調査
⑭	坂井遺跡	縄文前期～晚期	志村流藏『坂井』地方書院 昭和40年
⑮	坂井南遺跡	古墳前期・平安	昭和60年度 菲崎市教育委員会 第3次調査



第1図 伊藤塗第2遺跡①と周辺の遺跡



第2図 伊藤塗第2遺跡位置図 (1 : 10,000)

III 遺跡の地相概観

伊藤塗第2遺跡は、旧穴山小学校から700m程南東側の日当りの良い丘に所在し、北から西側にかけては伊藤塗の集落があり、南側は石水の集落が広がっている。西側には能見城が屹立している。遺跡の立地する丘陵は果樹園が主体となった耕地であり、耕作土を取り除くと暗黄褐色系乃至黄褐色系土層（ローム層）となる。遺構はこの土層中に掘り込まれていた。

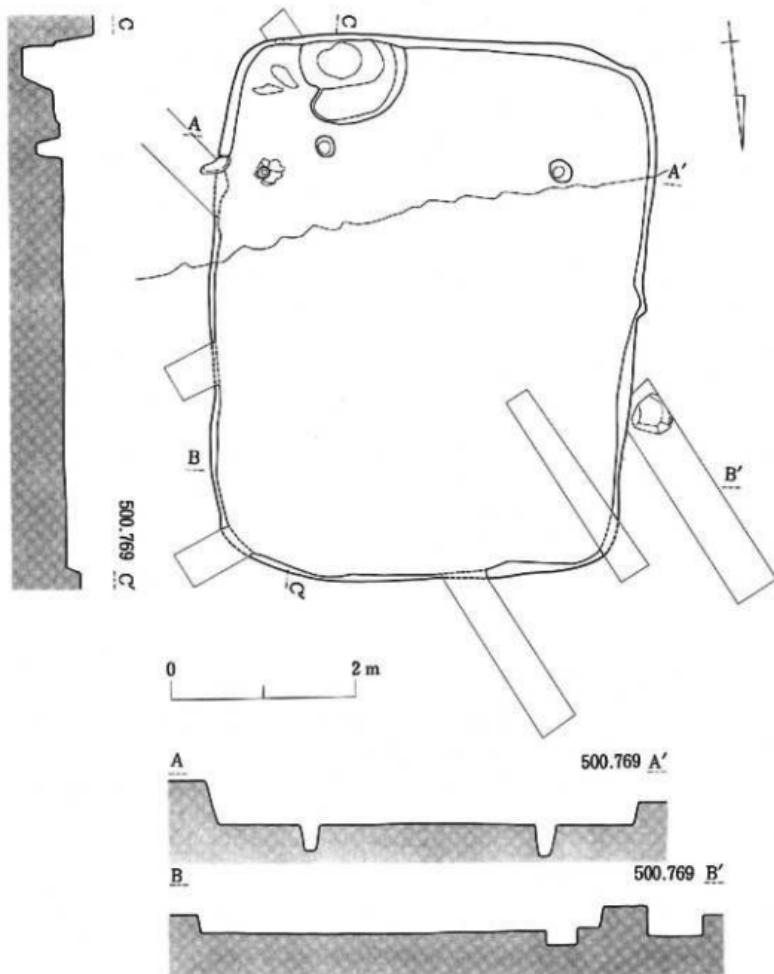
IV 調査の方法

試掘調査の結果をもとに調査区域を決め、遺構確認面となる暗黄褐色系乃至黄褐色系土層（ローム層）までを機械により排土作業を行い、測量等の基準に地形等を考慮し任意に10m及び5m間隔の方眼を設定。勘定等により精査を行い、遺構確認の後掘り下げを行った。また隨時補助的試掘小溝を設定し、遺構の確認等を図った。

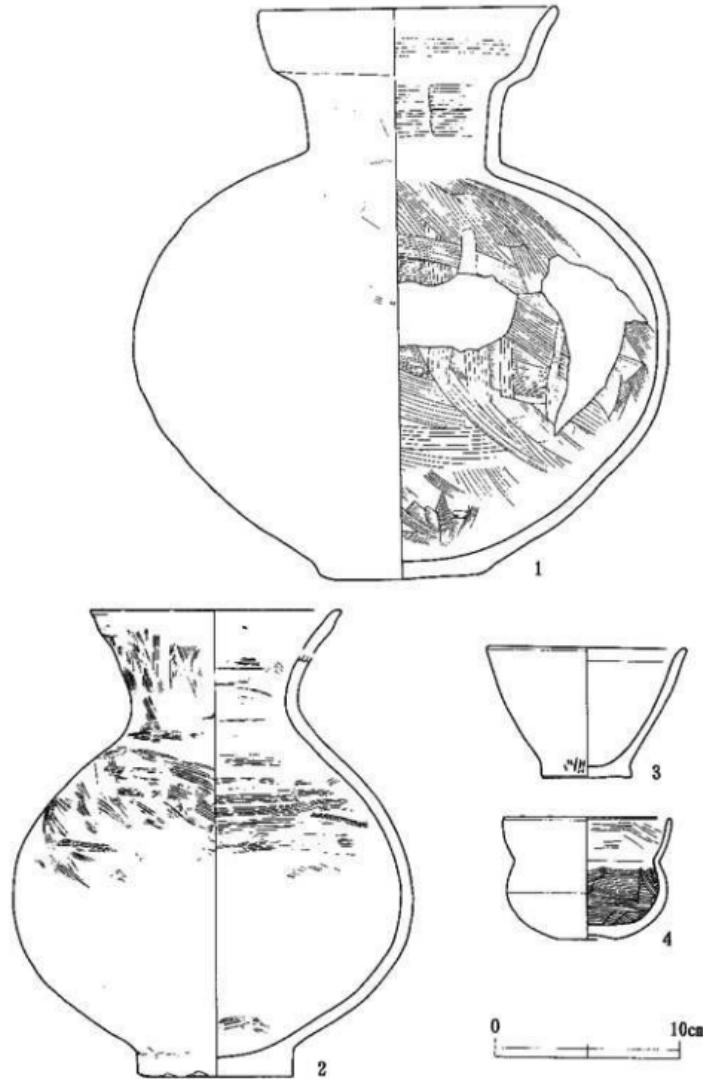
V 遺構と遺物

調査の結果発見された遺構は、古墳時代の竪穴住居址2軒、中世の地下式土壙3基、土坑1基、溝状遺構1条となっている。以下、遺構と遺物についてみていく。

<1号住居址>



第3図 1号住居址平・断面図(1/60)



第4図 1号住居址出土遺物 (1/3)

【遺構】(第3図)

調査区域北西部に位置する。暗黄褐色系土中に暗褐色系土の落ち込みを発見し掘り下げる。当該地区は畠であり、耕作等による擾乱が激しく、土器片等の遺物は出土するが遺構の平面形は不明瞭であった。推定では隅円長方形を呈すると思われる。補助的試掘小溝を設定し、床面を確認し壁の立ち上がりを検出した。北側3分の2は擾乱により不明。遺存部分での壁高は25~50cm前後を測る。床面は平坦で堅く踏み締めてある。柱穴は2本確認された。炉は検出されなかった。南壁東側に壁に接して約50×90cm深さ35cm程の長椭円形の穴があった。

【遺物】(第4図)

遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	壺	30.7, 15.8, 8.8	細かい砂粒を含む	にぶい黄橙色 にぶい橙色	内面-刷毛整形 外面-刷毛整形の後擦で乃至粗い磨きが施される (磨滅によりザラつき不鮮明) 口縁、肩一部欠損
2	土師器	壺	25.2, 13.3, 8.0	赤褐色粒子を含む 砂粒を含む	褪赤褐色 (黒斑アリ)	口縁部-横擦で 内面-刷毛整形の後擦で乃至磨きがかけられるが、上半部に刷毛目痕が顕著 外面-比較的確かな刷毛整形の後、粗い磨きが施される 上半~頸部上に刷毛目痕 1/2欠損
3	土師器	小型鉢	7.0, 10.5, 4.8	砂粒 金雲母を含む	橙色 (にぶい橙色)	口縁部-横擦で 外面-胴部磨減により不鮮明 1/2欠損
4	土師器	壺	6.6, 8.8, 3.4	砂粒 白色粒子 金雲母を含む	にぶい橙色 (にぶい黄橙色)	口縁部-横擦で 内面-胴部刷毛目整形 外面-胴部下半ヘラ削り 1/2欠損

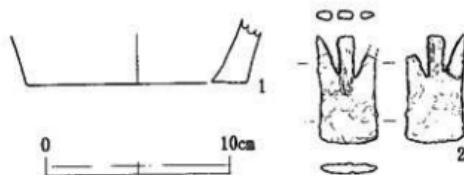
<2号住居址>

【遺構】(第6図)

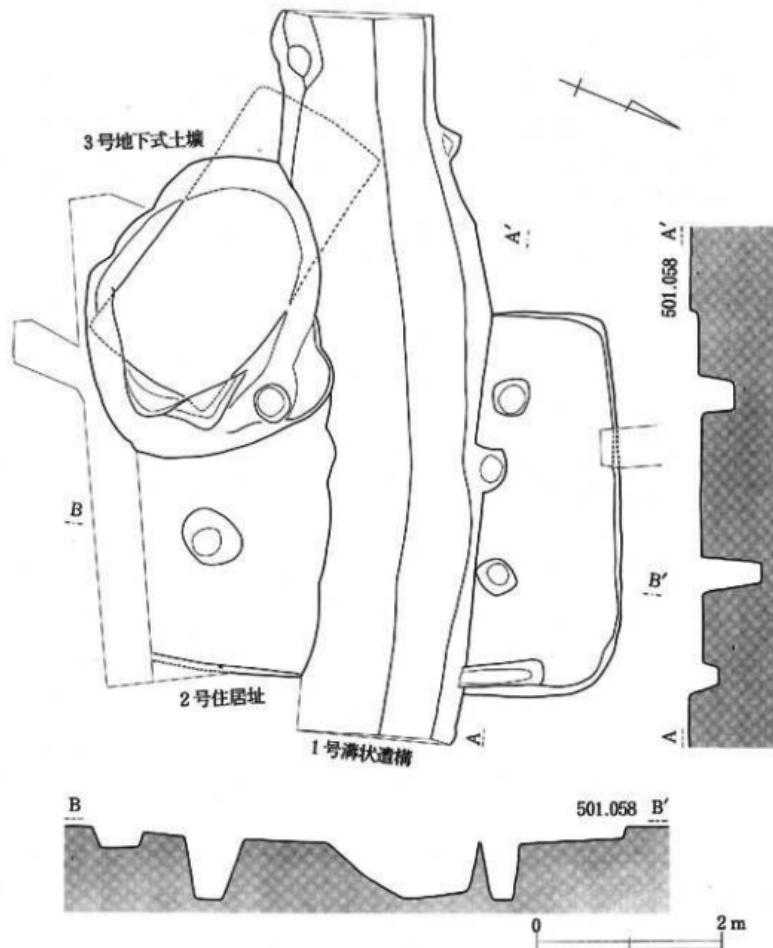
調査区域北側、1号住居址の南東に位置する。中央を1号溝状遺構が東西に流れ、南側には3号地下式土壙が構築され遺存状態の悪い住居址である。南東側壁は削平により不明瞭となっていたため、補助的試掘小溝を設定し確認作業を行ったが解らなかった。平面形は隅円長方形を呈すると思われる。規模は東西4.1m、南北は5.5m程であろうか。壁高は遺存部分で10cm前後を測る。床面は中央部分がやや隆んでいる。東壁際に浅い溝が検出されたが、周溝の類いであろうか。柱穴は4本主柱穴と思われるが、不揃いである。北側2本の柱穴間に柱穴と同規模の穴がある。炉は検出されなかった。

【遺物】(第5図)

後世の擾乱によるものか遺物の出土は極めて少なく、形状の復元できる土器はなかった。特殊なものとして北東隅柱穴北側の床面上から鉄製鎌が出土している。先端部分が欠損しているが、貴重な発見と言えよう。



第5図 2号住居址出土遺物 (1/3)



第6図 2号住居址、3号地下式土壤、1号溝状構造平・断面図 (1/60)

出土遺物一覧

(単位 cm)

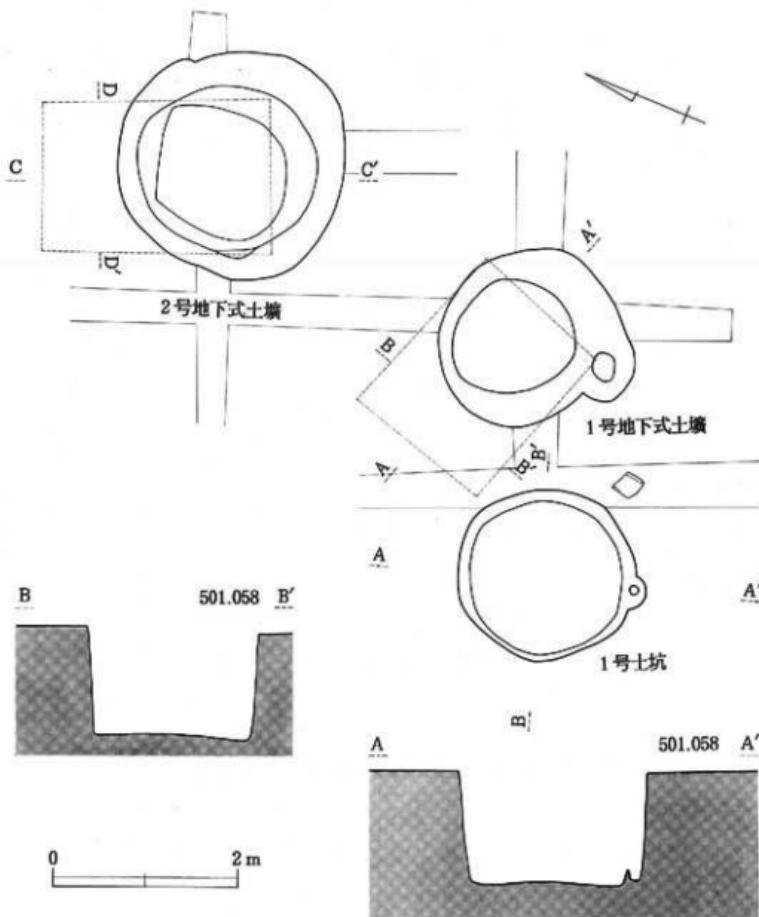
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調(内面) にぶい褐色 にぶい黄褐色 (一部黒変)	整形・特徴・その他
1	土師器	甌	-,-,11.8	やや粗い 砂粒を含む		底部碎片
2	鉄器	鎌				基部に木質部が多少残っている

<1号土坑>

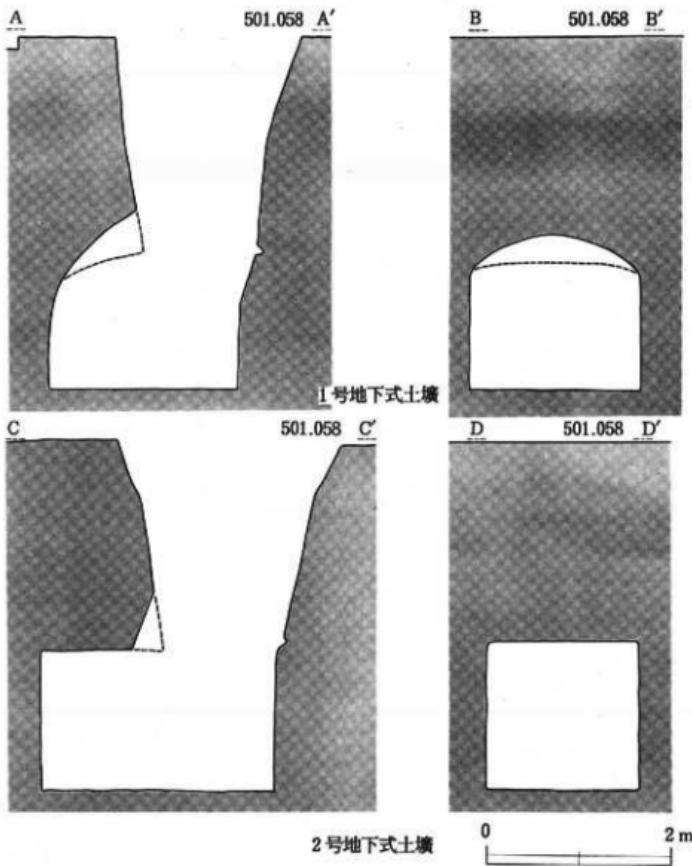
【遺構と遺物】(第7図)

調査区域中央に位置する。黄褐色系土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。平面形はやや不整な円形を呈する。規模は径1.8~1.9mを測る。壁はほぼ直に立ち上がる。壁高は約1.2mを測る。底面は平坦。南側に細い立て坑があった。

遺物は皆無と言って良いほど出土しなかった。



第7図 1号土坑、1号地下式土壤、2号地下式土壤平・断面図(1/60)



第8図 1号地下式土壤、2号地下式土壤断面図(1/60)

<1号地下式土壤>

【造構と遺物】(第7・8図)

調査区域中央に位置する。黄褐色系土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。確認面からの地下室床面の深さは約3.8mを測る。堅坑は入り口部で漏斗状に開く形態のもので、ほぼ直に入り込み西側に地下室を設けてある。地下室の平面形は長方形を呈し、短辺約1.6m、長辺約2mを測る。天井は本来は平らであったと思われるが、半分ほど崩れており蒲鉾状の断面を呈する。堅坑中段部分には、足場のための孔がつくられていた。

遺物は皆無と言って良いほど出土しなかった。

<2号地下式土壙>

【遺構】(第7・8図)

調査区域中央に位置する。黄褐色系土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。確認面からの地下室床面の深さは約3.8mを測る。竪坑の形態は入り口部で漏斗状に開きほぼ直に入り込むもので、北西側に地下室を設けてある。地下室の平面形は長方形を呈し、短辺1.6m前後、長辺約2.5mを測る。本遺構は天井部に亀裂が生じていたため、万が一の事故を考え発掘半ばで中断し簡易測量を行った。天井は平坦で方形の断面を呈すると思われる。

竪坑中段部分には、足場のための孔がつくられていた。

【遺物】(第9図)

遺物の出土は極めて少ない。埋没土中から土器の把手が出土したので資料として図示した。

出土遺物一覧

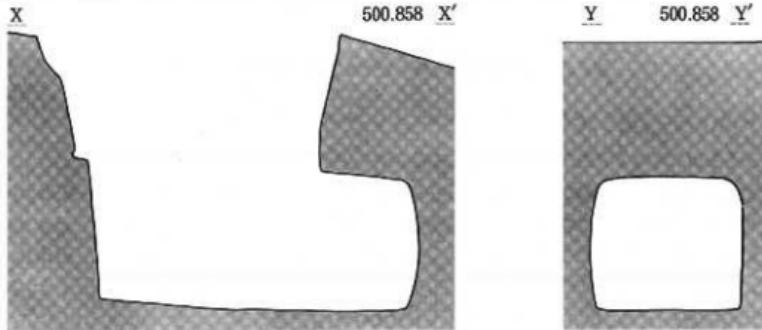
(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	褐土文器	深鉢	- - -	砂粒を含む	にぶい橙色 橙色	沈線によるY字状文、渦巻文が施される。

<3号地下式土壙>

【遺構】(第6・10図)

調査区域北側に位置する。北側は2号住居址を切って構築される。確認面からの地下室床面の深さは3m前後を測り、床面は奥へ緩やかに傾斜している。入り口部分から天井の3分の2が崩

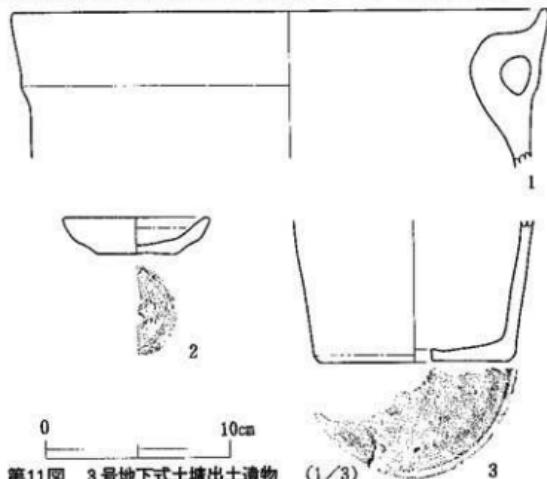


第10図 3号地下式土壙断面図

(1/60) 0 2 m

落していた。堅坑は入り口部で漏斗状に開く形態のものと思われ、ほぼ直に入り込み西側に地下室を設けてある。地下室の平面形は長方形を呈し、短辺約1.5m、長辺約3.3mを測る。天井は本来は平らであったと思われるが、崩れおり、遺存部分の断面は上端が円い方形状の断面を呈する。堅坑中段部分には、足場のための平坦なスペースがつくられていた。

【遺物】(第11図)
遺物の出土はあまり多くない。



第11図 3号地下式土壙出土遺物

(1/3)

(単位 cm)

出土遺物一覧

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
1	土師質	内耳土器	—	28.0	—	細かい砂粒を含む	にぶい橙色 にぶい褐色
2	土師質	かわらけ	2.0	7.6	4.0	細かい砂粒を含む	にぶい黄橙色
3	土師質	埴木鉢	—	—	10.2	細かい砂粒を含む	オリーブ黒色

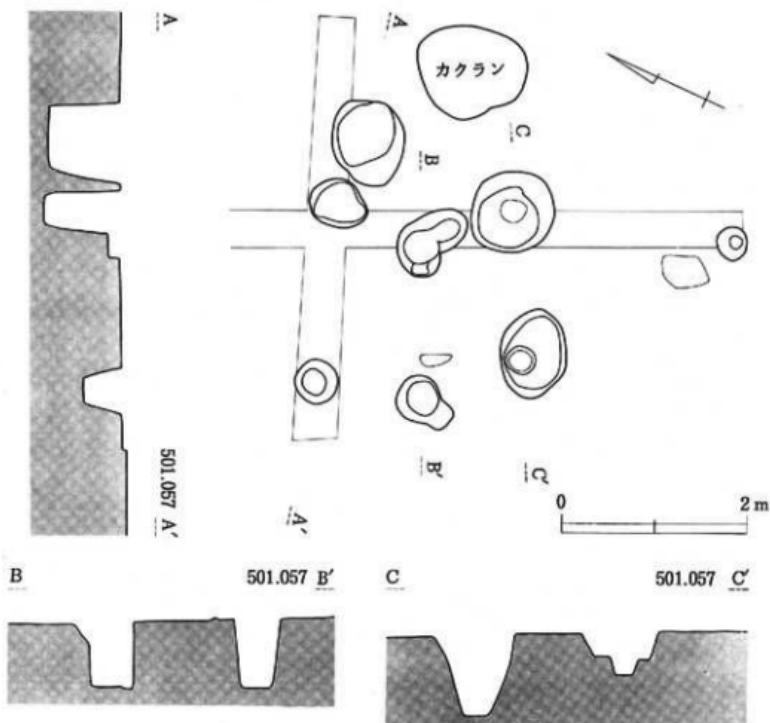
<ピット群>

【遺構】(第12図)

調査区域南半部に位置する。黄褐色系土中に暗褐色土の落ち込みを何カ所か発見し、補助的試掘小構を設定し発掘する。各ピットの平面形態は不整の円形で、直径は35cm前後~90cm前後と不揃いで、確認面からの深さもまちまちである。穴の底面はほぼ平となっていた。本ピット群は、獨立柱建物址のように規則的に配列されておらず、遺構の性格はつまびらかではない。西側と南側の2箇所に埴土が確認されたが、ピット群に伴うものかその他にかかわりがあるものか不詳である。東側には擾乱による浅い掘り込みがあった。

【遺物】

ピット群のピットからは直接遺物の出土はみられなかった。但し、周辺からは土師質土器が採集されている。遺構外出土遺物として扱っておいた。



第12図 ピット群平・断面図 (1/60)

<遺構外>

【遺物】

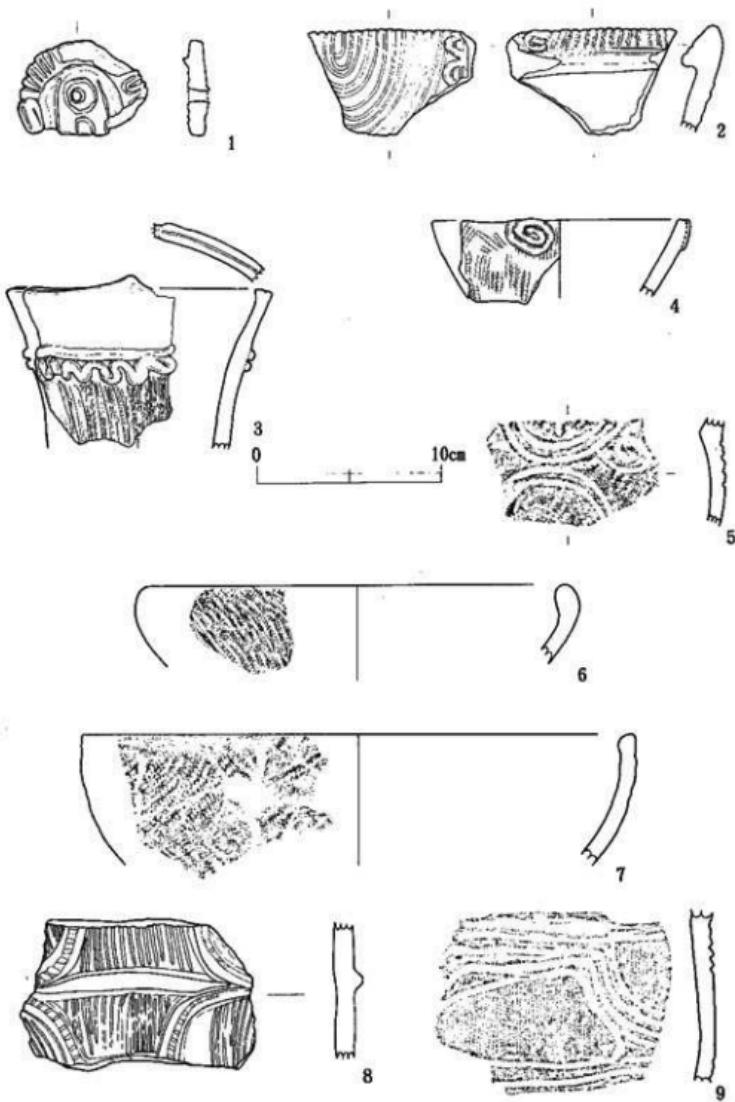
本遺跡からは、排土作業並びに遺構検出作業等で土器片が採集されている。遺構に伴うもの以外を次に紹介しておこう。

縄文時代 (第13~18図)

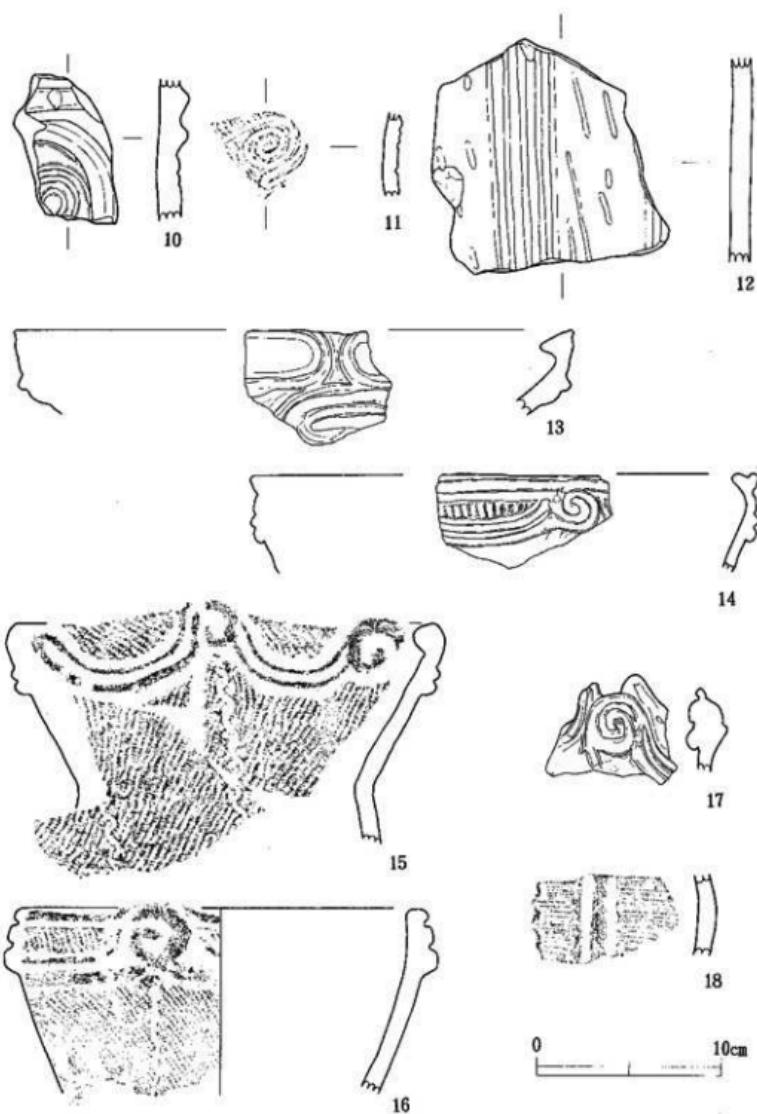
出土遺物一覧

(単位 cm)

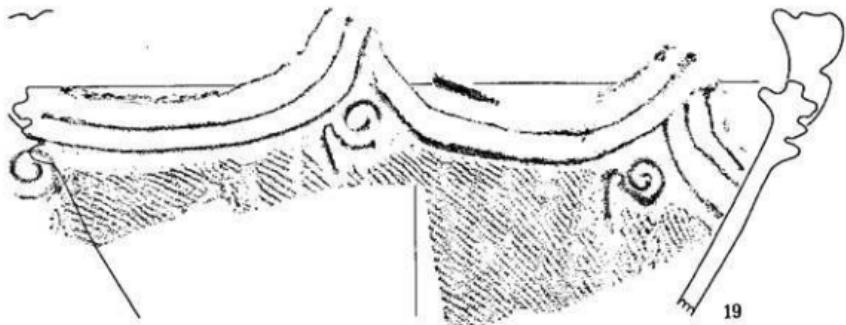
番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	縄文器		-	-	砂粒を含む	にぶい橙色系 黒変	中央に円孔があり。そのまわりに沈線がめぐり、さらに両側にも沈線がみられ、外周に刻み目が施されている 破片
2	縄文器	深鉢	-	-	白色粒子 砂粒を含む	橙色 にぶい褐色	粘土ひもと沈線により横樋が施されている 口縁部破片
3	縄文器	深鉢	-	-	金雲母 砂粒を含む	にぶい黄褐色 にぶい褐色	頭部に2本の粘土ひもをめぐらす。 内1本は蛇行している 頭部は条線が施されている



第13図 造機外出土遺物 (1/3)

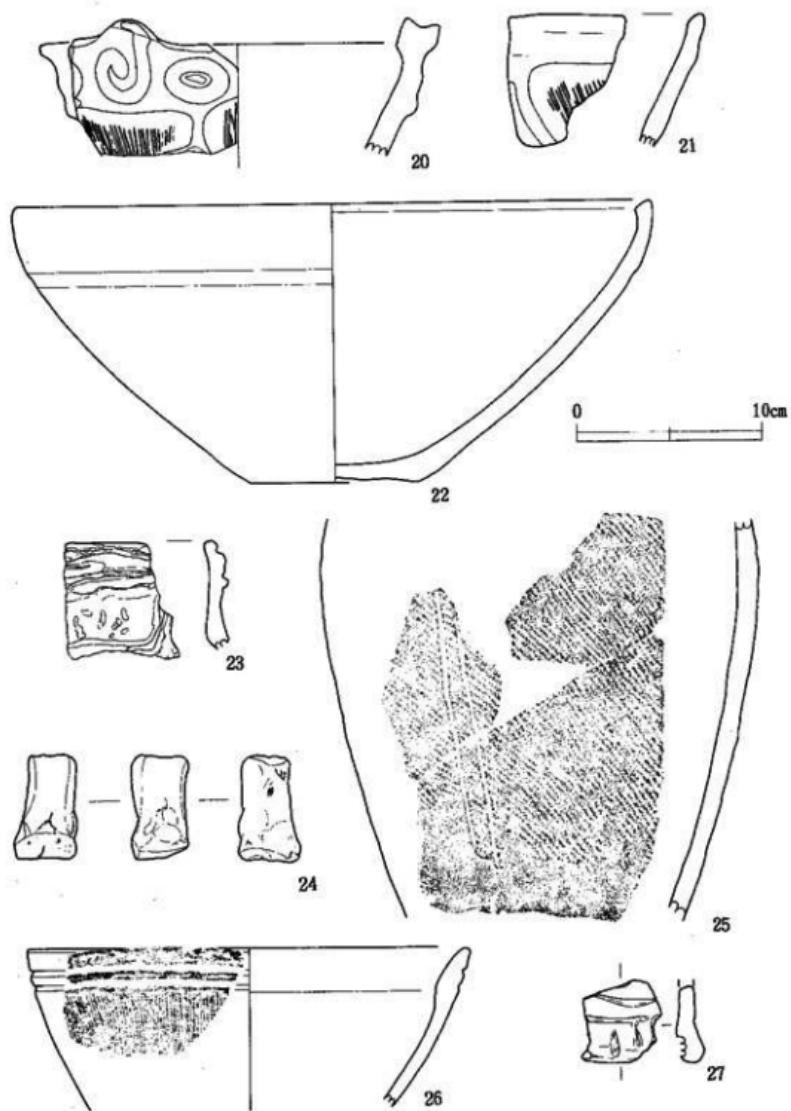


第14図 遺構外出土遺物 (1/3)

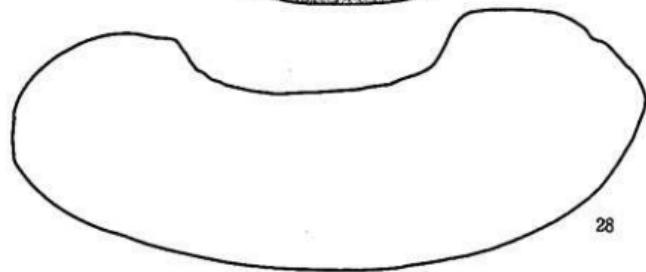
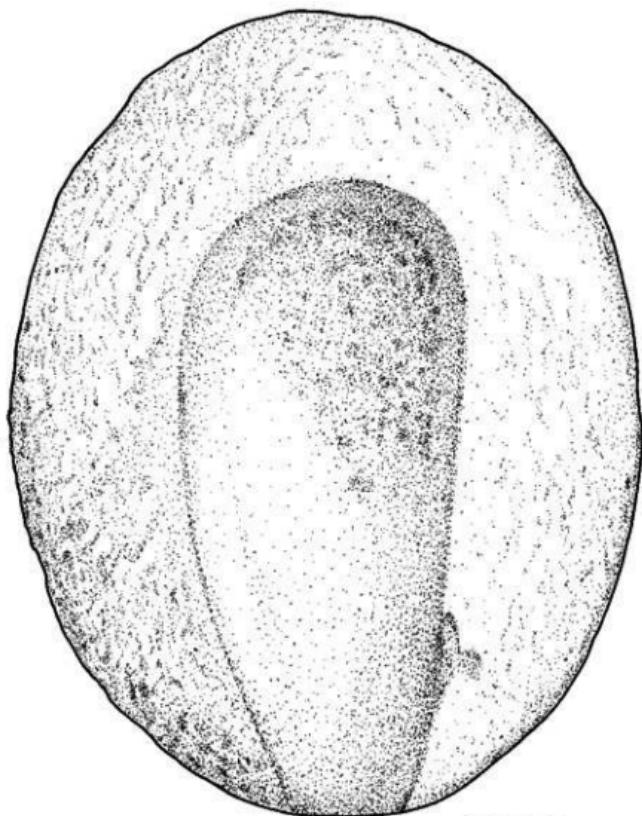


第15図 遺構外出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
4	縄文器	深鉢	- , 13.2 , -	細かい砂粒を含む	にぶい橙色	口縁部に粘土ひもによるうす巻文 器面には、縄文が施される 口縁部破片
5	縄文器	鉢	- , - , -	白色粒子 砂粒を含む	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	器面に縄文を施した後次線により 模様が描かれている 破片
6	縄文器	深鉢	- , 22.5 , -	白色粒子を含む	にぶい黄橙色 橙色	縄文が施されている 口縁部破片
7	縄文器	鉢	- , 29.6 , -	砂粒を含む	明黄褐色 褐色	口縁部破片
8	縄文器	深鉢	- , - , -	砂粒、金墨母 を含む	黒褐色 にぶい褐色	条線と有刺縫帶が施されている 破片
9	縄文器	深鉢	- , - , -	砂粒を含む	にぶい黄褐色	沈線と条線が施されている 破片
10	縄文器	深鉢	- , - , -	粗い白色粒子 砂粒を含む	灰黄色 オリーブ黒色	隆帯、沈線により模様が施されて いる 破片
11	縄文器	深鉢	- , - , -	砂粒、墨母 を含む	にぶい橙色	漫巻状の沈線と縄文による文様が 施されている 破片
12	縄文器	深鉢	- , - , -	少量の金墨母 砂粒を含む	にぶい橙色 にぶい褐色	4本の隆帯が継走しその間に沈線 により文様が施されている 破片
13	縄文器	深鉢	- , 30.0 , -	砂粒を含む	暗赤灰色	梢円形の隆帯が施されている 口縁部破片
14	縄文器	深鉢	- , 25.0 , -	砂粒を含む	にぶい橙色	内側に沈線充填された隆線による 渦巻つなぎ文 口縁部破片
15	縄文器	深鉢	- , 22.5 , -	砂粒を含む	にぶい黄褐色 にぶい橙色	縄文を地文とし、粘土貼りつけ連 環文が施され、結節縄文が垂下する。 口縁～頸部破片

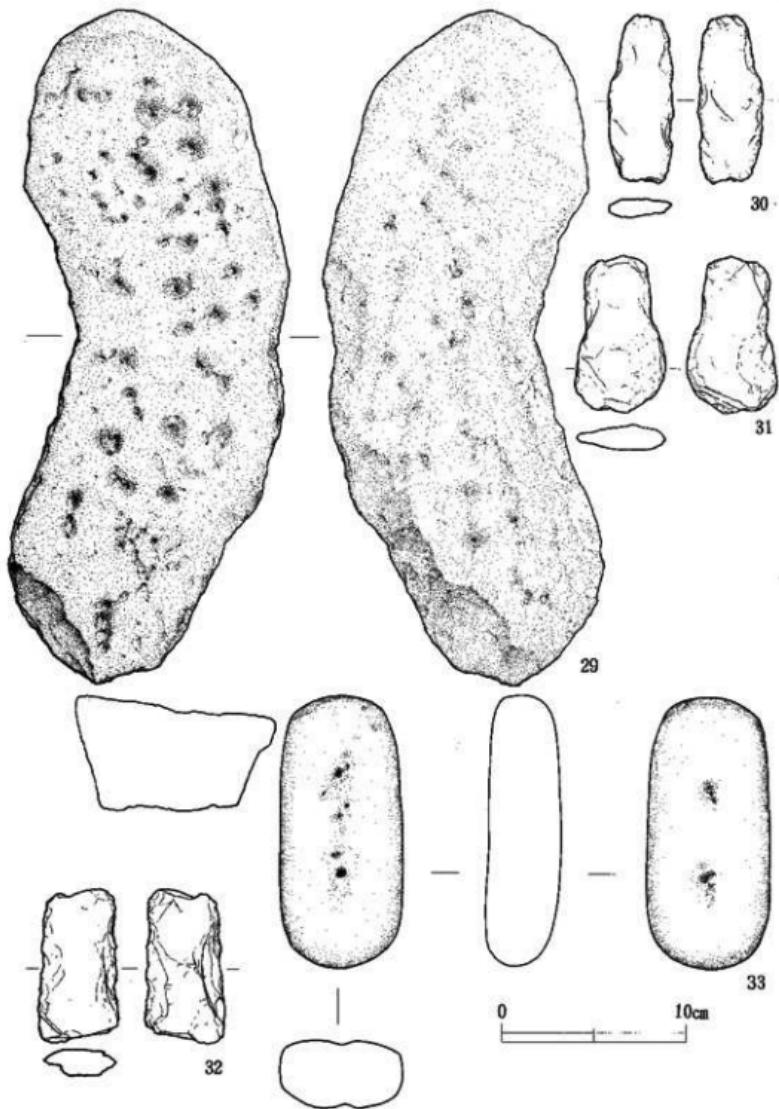


第16図 遺構外出土遺物 (1/3)



28

第17図 造構外出土遺物 (1/3)



第18図 遺構外出土遺物 (1/3)

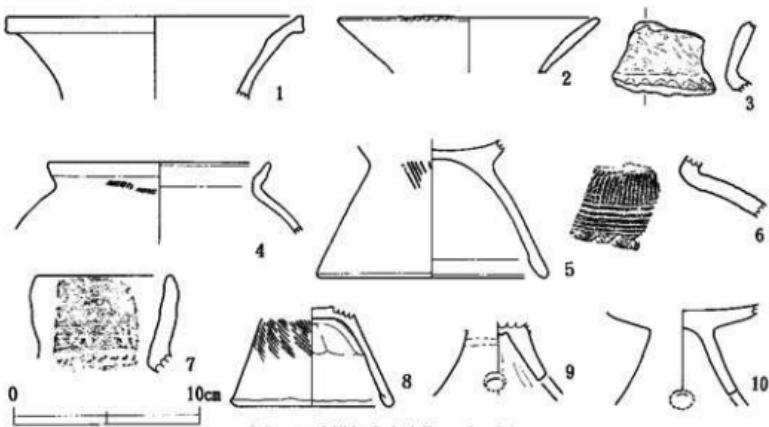
番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
16	縄文器 土器	深鉢	-, 21.4, -	白色粒子を多く含む	にぶい褐色	口縁部は縦線による渦巻つなぎ文で、内部に縄文充填。底部に縄文渦巻から蛇行する沈線並下 口縁部破片	
17	縄文器 土器	深鉢	-, -, -	砂粒を含む	にぶい黄褐色	渦巻隆帯と突起がある 口縁部破片	
18	縄文器 土器	深鉢	-, -, -	砂粒を含む	褐色	縦隆帯と横条線がみられる 破片	
19	縄文器 土器	深鉢	-, 39.0, -	やや粗い砂粒を含む	にぶい黄褐色	器面は縄文を地文とし、口縁は突 帶により波状を呈し、その間に粘 合ひもによる渦巻文、そこから蛇 行した沈線が垂下する 口縁部破片	
20	縄文器 土器	深鉢	-, 22.0, -	砂粒 白色粒子を含む	褐色 にぶい赤褐色	口縁部-隆帯と横円形等の沈線文 外面-隆帯で区割され、内側に縦 斜条線が施されている	
21	縄文器 土器	深鉢	-, -, -	砂粒 白色粒子を含む	褐色 灰褐色	外面-隆帯により区割され、内側 は縦斜条線が施されている 口縁部破片	
22	縄文器 土器	鉢	15.0, 34.0, 9.0	砂粒 白色粒子を含む	にぶい黄褐色 (底部黒変)	器面は丁寧に磨かれている 口縁-底部破片	
23	縄文器 土器	深鉢	-, -, -	砂粒を含む	黒褐色 にぶい黄褐色	隆帯がみられる 口縁部破片	
24	縄文器 土偶			砂粒を含む	にぶい褐色		脚部破片
25	縄文器 土器	深鉢	-, -, -	砂粒を含む	にぶい黄褐色	縄文を地文として、沈線を垂下さ せる 脚部破片	
26	縄文器 土器	深鉢	-, 26.0, -	砂粒 白色粒子を含む	にぶい褐色 にぶい橙色 灰褐色	口縁部-隆帯が施されている 外面-縦斜条線で施されている	
27	縄文 土偶?			砂粒 細かい白色 粒子、裏母を 多く含む	にぶい橙色 (黒変)		脚部破片?
28	石器	石皿					
29	石器					蝶の巣石	
30	石器	斧					
31	石器	斧					
32	石器	斧					
33	石器	凹石 磨石					

古墳時代（第19図）

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器 土器	壺	-, 15.8, -	金雲母 微砂粒を含む	にぶい黄褐色 褐色一部黒変	外面はヘラ磨き 内面は削落により不鮮明 口縁部破片	



第19図遺構外出土遺物 (1/3)

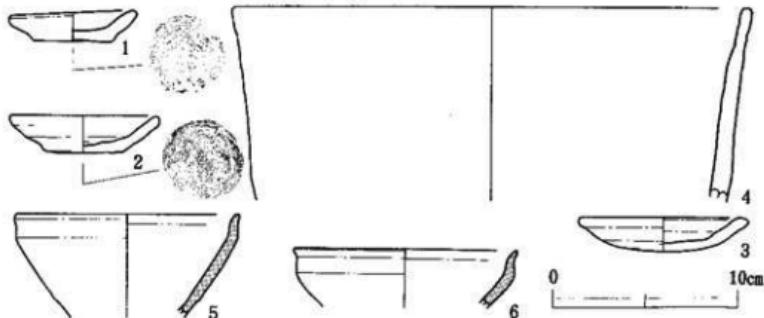
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
2	土師器	壺	- , 13.6 , -	微砂粒を含む	浅黄褐色	撫で 口縁部の一部に刻目あり 口縁部破片
3	土師器	壺	- , - , -	金雲母、赤色 粒、砂粒を含む	浅黄褐色	口縁部の内側は横擦で、外面は刷毛目、頸部に波状文が施されている 口縁部破片
4	土師器	壺	- , 12.0 , -	金雲母 砂粒を含む	にぶい褐色 にぶい褐色	口縁部は横擦でされ 外面に刷毛目模がみられる 口縁部破片
5	土師器	S字状 口縁 台付壺	- , - , 12.0	金雲母 砂粒を含む	にぶい褐色 褐色	外面に刷毛目 脚部折り返し 脚台部破片
6	土師器	S字状 口縁 台付壺	- , - , -	金雲母 砂粒を含む	褐色	外面に刷毛目模あり 肩部に刷毛状工具による刻目状文様がめぐる 口縁部破片
7	土師器	壺	- , 7.0 , -	金雲母 砂粒を含む	浅黄褐色	口縁部横擦で 頸部に刺突文がみられる 口縁部破片
8	土師器	S字状 口縁 台付壺	- , - , 8.4	金雲母 砂粒を含む	褐色、一部 にぶい黃褐色	内側は撫で、外面は刷毛目 折り返しあり 口縁部破片
9	土師器	高環	- , - , -	密	にぶい褐色	内面へラ削り 底部に円孔が3ヶ所あけられている
10	土師器	高環	- , - , -	細かい白・ 赤色粒子を 含む	褐色	内面はへラ削りがあるが磨滅によ り不鮮明、底部に円孔があり 脚台部破片

中世 (第20図)

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
1	土師質	かわらけ	1.55, 6.5, 4.3	金雲母、砂粒 を含む	褐色	ロクロ水挽き 底部回転糸切り 完形



第20図 造構外出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
2	土師質	かわらけ	2.1, 8.0, 4.0	砂粒、金雲母を含む	褐色	ロクロ水焼き 底部回転糸切り 完形
3	土師質	かわらけ	1.9, 9.0, 3.0	砂粒、金雲母を含む	明黄褐色	ロクロ水焼き 底部ヘラ削り $\frac{1}{2}$ 欠損
4	土師質	内耳土器	-, 27.0, -	砂粒を含む	にぶい赤褐色 黒褐色	器面は横施で 外面一縁付着 破片
5	陶器	茶碗	-, 12.0, -	精製	黒色	鉄軸がかけられている 破片
6	陶器	茶碗	-, 12.0, -	精製	暗褐色	鉄軸がかけられている 破片

<1号溝状造構>

【造構と遺物】（第6図）

調査区域北側に位置する。2号住居址のほぼ中央を切って掘られている。東から西に向かって直線状に流れをもつ。断面は逆台形を呈し、南側が緩やかな傾斜で北側は直立気味に立ち上がる。時期及び造構の性格を決定するような遺物の出土は見られなかった。

VI 伊藤窪第2遺跡出土土器の胎土分析

山梨文化財研究所 河 西 學

1 はじめに

岩石学的手法による土器の胎土分析では、周辺地域の表層地質の特徴と土器胎土中の岩石鉱物組成との比較によって産地を推定する。同一地域において時代が異なる土器の胎土組成、製作技法の違いはあるものの、もしもその地域の堆積物を土器原料として使用している場合、それぞれの土器の岩石鉱物組成は類似するはずである。しかし実際の地質は複雑であり、製作技術の違いなどから、同一地域で製作された異なる時代の土器胎土組成がかららずしも一致するとはいえない。山梨県下における胎土分析例はまだ少なく、一つの遺跡で出土した異なる時代の土器の分析例はほとんどない。今回韮崎市伊藤窪第2遺跡で出土した縄文時代中期と弥生時代最終末～古墳時代前期の土器について胎土分析をする機会を得たのでここに報告する。

2 伊藤窪第2遺跡の立地

本遺跡は韮崎市穴山町伊藤窪地内にある。この地域は、韭崎岩屑流堆積物とともに流れ山地形が顕著である韭崎台地上に位置する。韭崎台地は八ヶ岳南麓の延長で、南南東方向に細長く舌状に伸びた台地である。遺跡付近での韭崎台地の東西幅は約1.5kmで、東側では比高約80mの崖線によって塙川の冲積低地（藤井平）と、西側では比高約100mの急崖によって金無川と接している。遺跡は流れ山の一部をなす高まり上に位置している。周囲の地質は韭崎岩屑流堆積物の上位に褐色風化古土壤、その上に御岳第一砾石Pm-I以上のテラフを含む褐色風化火山灰層（ローム層）が厚く堆積している。韭崎台地付近の韭崎岩屑流堆積物は八ヶ岳火山の山体崩壊に起源する堆積物であることから八ヶ岳を構成する安山岩質の碎屑物が主体であるが、当時の河川堆積物である花崗岩類・ホルンフェルス・砂岩・泥岩あるいは緑色変質した火山岩類などが混入している（甲府盆地第四紀研究グループ、1969；河西、1988）。金無川上流には甲斐駒ヶ岳型の花崗岩類を主体に、堆積岩からなる四万十層群、堆積岩と緑色変質した火山岩類からなる新第三系が分布する。塙川上流には金峰山付近の花崗岩類、黒富士火山のデイサイト質火山噴出物、あるいは茅ヶ岳・横尾山などの安山岩、斑岩を中心とした四万十帯の増富層群など分布が知られている。

3 試 料

分析試料は土師器が14点（このうちS字状口縁台付壺は4点）、縄文時代中期土器が20点である。試料表を第1表に、また土器の拓影図を第21図に示す。

4 分析法

分析法は宮ノ前第2遺跡（河西、1991）と同様の方法で行った。

5 土器の岩石鉱物組成

分析結果を第2表に示す。これをもとに試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの構成を示した全体構成図、および砂粒子の岩石鉱物組成・重鉱物組成などを第22図に示す。なお重鉱物組成では右側に基数を表示した。以下に特徴を述べる。

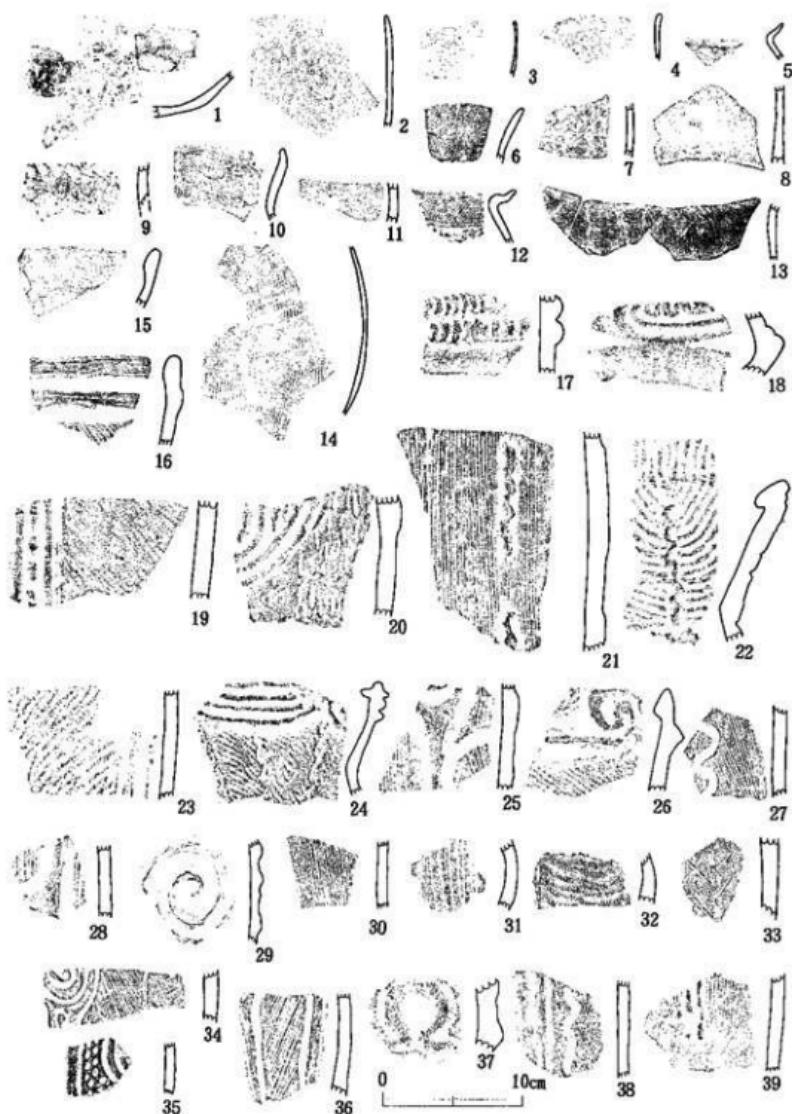
第1表 試 料 表

試料番号	時代	型式	器種	部位	色	調	出土地点
No.1	古墳前期	高环		底部	7.5YR6/8	橙	1号地下式土壙
No.2	古墳前期	高环		口縁部	7.5YR6/6	橙	遺構外
No.3	古墳前期	S字状口縁台付甕	脣部	10YR3/3	暗褐		遺構外
No.4	古墳前期				7.5YR6/8	橙	
No.5	古墳前期	S字状口縁台付甕	口縁部	5YR6/6	橙		3号地下式土壙
No.6	古墳前期				7.5YR6/6	橙	
No.7	古墳前期	鉢	脣部	10YR6/6	橙		2号住
No.8	古墳前期	壺	頸部	7.5YR6/6	橙		遺構外
No.9	古墳前期	壺	脣部	10YR7/3	にぶい黄橙		遺構外
No.10	古墳前期	甕	口縁部	10YR7/3.5	にぶい黄橙		遺構外
No.11	弥生最終末	甕	脣部	10YR7/4	にぶい黄橙		2号住
No.12	古墳前期	S字状口縁台付甕	口縁部	10YR2/2	黒褐		遺構外
No.13	古墳前期	壺	頸部	10YR4/6	赤		遺構外
No.14	古墳前期	S字状口縁台付甕	脣部	5YR6/6	橙		遺構外
No.15	縄文中期	曾利III／IV	深鉢	口縁部	7.5YR6/4	にぶい橙	遺構外
No.16	縄文中期	曾利IV	深鉢	口縁部	2.5YR5/6	明赤褐	遺構外
No.17	縄文中期	井戸尻	深鉢	脣部	7.5YR5/4	にぶい褐	遺構外
No.18	縄文中期	井戸尻	深鉢	底部	7.5YR6/6	橙	遺構外
No.19	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	5YR5/6	明赤褐	遺構外
No.20	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	10YR7/4	にぶい黄橙	遺構外
No.21	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	7.5YR6/4	にぶい橙	1号住
No.22	縄文中期	曾利II	深鉢	口縁部	5YR5/4	にぶい赤褐	遺構外
No.23	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	5YR5/2	灰褐	遺構外
No.24	縄文中期	曾利II	深鉢	口縁部	5YR6/6	橙	遺構外
No.25	縄文中期	曾利III／IV	深鉢	脣部	10YR6/4	にぶい黄橙	遺構外
No.26	縄文中期	加曾利E 2	深鉢	口縁部	7.5YR7/3	にぶい橙	遺構外
No.27	縄文中期	曾利III／IV	深鉢	脣部	7.5YR5/4	にぶい褐	遺構外
No.28	縄文中期	曾利III／IV	深鉢	脣部	7.5YR5/3	にぶい褐	遺構外
No.29	縄文中期	曾利III／IV	深鉢	脣部	10YR4/1	褐灰	遺構外
No.30	縄文中期	曾利II／III	深鉢	脣部	5YR4/2	灰褐	遺構外
No.31	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	2.5YR5/6	明赤褐	遺構外
No.32	縄文中期	曾利IV／V	深鉢	脣部	7.5YR4/1	褐灰	遺構外
No.33	縄文中期	曾利V	深鉢	脣部	7.5YR5/4	にぶい褐	2号住
No.34	縄文中期	曾利IV	深鉢	脣部	10YR6/6	橙	遺構外
No.35	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	7.5YR5/4	にぶい褐	遺構外
No.36	縄文中期	曾利III／IV	深鉢	脣部	7.5YR6/4	にぶい橙	遺構外
No.37	縄文中期	新道	深鉢	脣部	5YR6/6	橙	遺構外
No.38	縄文中期	曾利IV	深鉢	脣部	7.5YR2/1	黒	遺構外
No.39	縄文中期	曾利II	深鉢	脣部	7.5YR6/6	橙	遺構外

a. 土師器

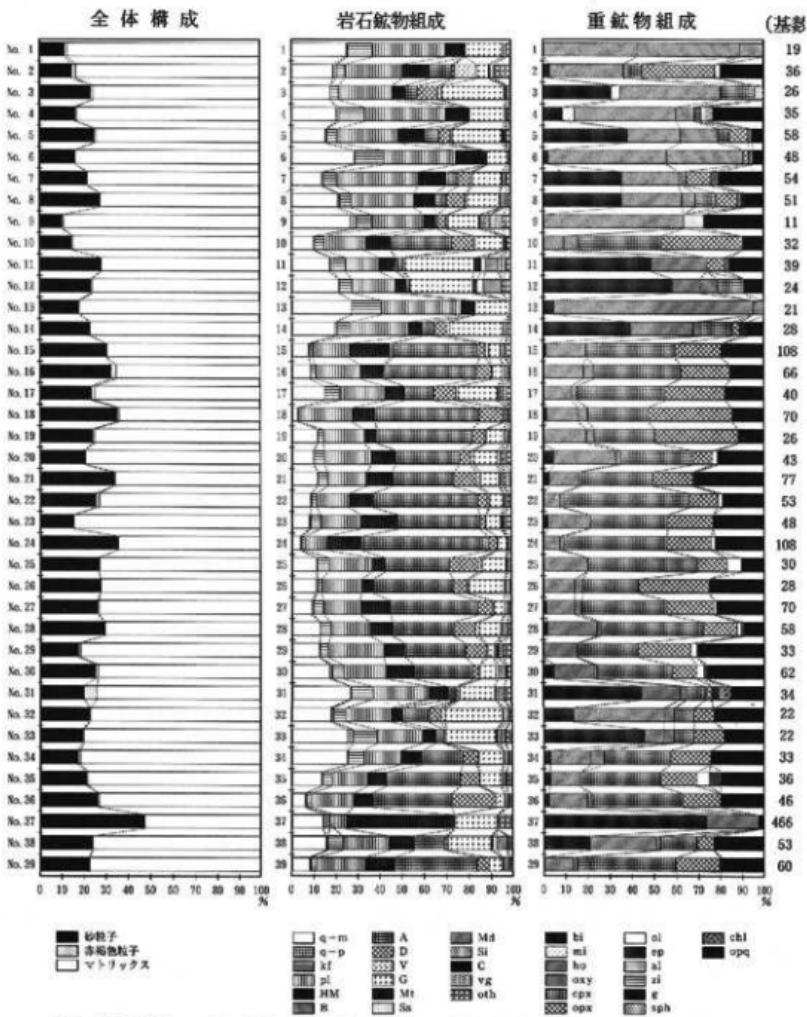
全体構成では、砂粒子10.0~27.0%、赤褐色粒子0.2~2.0%、マトリックス72.7~89.4%を示す。赤褐色粒子が少なく、砂粒子が試料によってばらつく傾向がある。

岩石鉱物組成では、石英（単結晶）9.8~28.2%、カリ長石3.8~13.4%、斜長石15.4~36.9%、および花崗岩類5.3~32.4%が普遍的に検出されることで特徴づけられる。Nos.2,3,5,7,8,9,10,14では、安山岩・デイサイトが数~10%程度検出され、特にNo.10では安山岩が28.0%を示す。またNos.11,12では泥岩が5.7~8.1%検出される。重鉱物は、5.3~14.8%含まれる。



第21図 分析試料の拓影図

第2表 伊藤産第2迴防出土器の岩石鉢物（数字はポイント数、+は計数以外の検出を示す）



第22図 伊萬窟第2遺跡出土土器の岩石鉱物組成

重鉱物組成では、Nos. 3, 5, 7, 8, 11, 12, 14において黒雲母が31~58%と多く、角閃石13~46%や酸化角閃石・不透明鉱物を伴う。Nos. 1, 4, 6, 9, 13は、角閃石42~91%および酸化角閃石0~47%が優勢である。Nos. 2, 10は、斜方輝石33~38%および單斜輝石6~38%が多く、角閃石・不透明鉱物を伴う。

b. 繩文土器

全体構成では、砂粒子が一般に14.4~34.6%だが、No. 37では47.3%を占める。赤褐色粒子はふつう0.1~2.4%だが、No. 31では5.7%とやや多く、マトリックスは52.5~85.3%を占める。No. 31を除き赤褐色粒子が少なく、砂粒子が試料によってばらつく傾向がある。

岩石鉱物組成では、石英（単結晶）2.6~26.5%、カリ長石0.3~11.0%、斜長石5.6~25.7%、および花崗岩類0.8~25.8%が普通に検出されるが、土師器と比較して安山岩が3.7~58.8%と多量に含まれる試料が多いことが特徴である。デイサイトは数~10%以下が普通だが、No. 36では19.9%を示す。重鉱物は、No. 37で49.3%ときわめて多いが、他試料では4.9~18.3%を示す。

重鉱物組成は、Nos. 31, 33, 37において黒雲母が44~74%と卓越し、角閃石を伴う。Nos. 32, 38では、角閃石が30~41%と多く、不透明鉱物・黒雲母・單斜輝石・斜方輝石を伴う。これら以外の試料は、單斜輝石25~57%および斜方輝石9~39%が優勢で、不透明鉱物・角閃石ときにカンラン石をわずかに伴う。

6 土器の分類

土器の産地推定には、地域を限定することのできる情報を豊富に含んでいる粒子を指標とすることが有効である。そこで地質と関連性が高い岩石粒子である次の、変質火山岩類+凝灰岩・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類（ホルンフェルスを含む）・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩を選択した。それら10岩石種のポイント総数で各岩石のポイント数を除した値を変数とし、岩石組成折れ線グラフ（第23図）およびクラスター分析樹形図（第24・25・26図）（注1）を作成し、土器を以下のように分類した。

a. 折れ線グラフによる分類

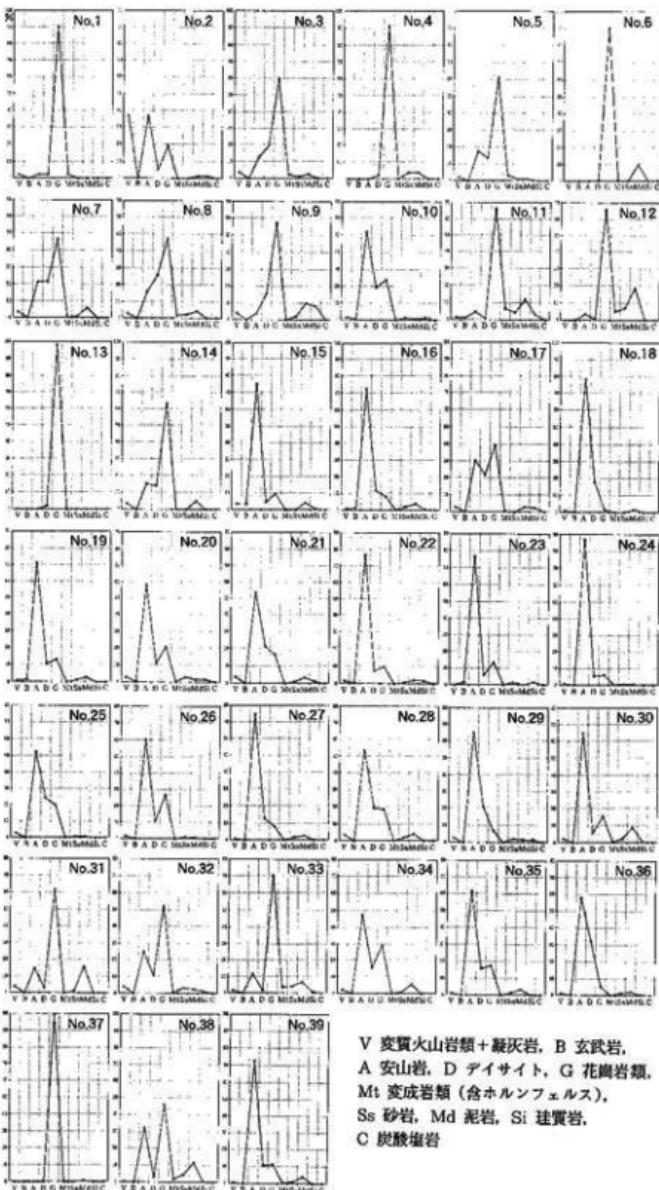
I群 花崗岩類の第1ピーク

- | | |
|-------------------|--|
| (I a) 顕著な第1ピーク | Nos. 1, 4, 6, 13, 37 |
| (I b) 安山岩の第2ピーク | (I b1) デイサイトの第3ピーク Nos. 5, 7, 14, 17, 32 |
| | (I b2) 泥岩の第3ピーク Nos. 31, 33, 38 |
| (I c) デイサイトの第2ピーク | Nos. 3, 8, 9, |
| (I d) 泥岩の第2ピーク | Nos. 11, 12 |

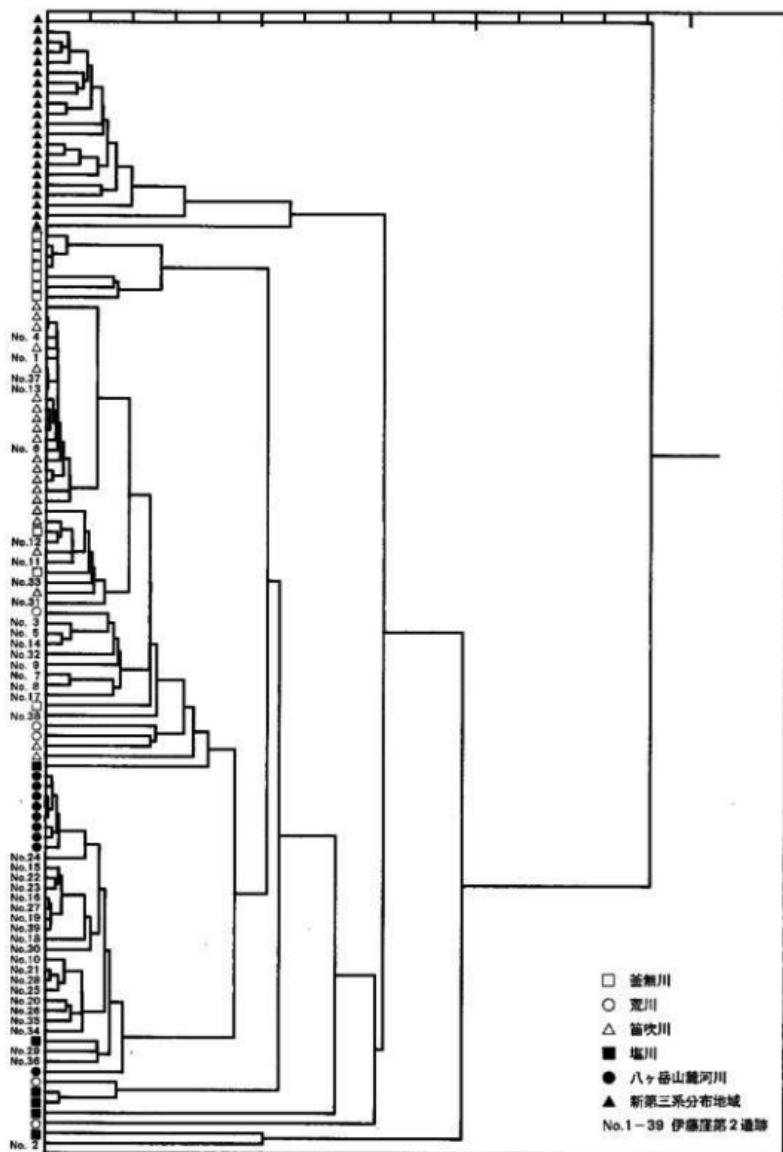
II群 安山岩の第1ピーク

- | | |
|--------------------|---|
| (II a) 花崗岩類の第2ピーク | Nos. 10, 15, 19, 20, 22, 23, 24, 26, 30, 34, 35, 39 |
| (II b) デイサイトの第2ピーク | Nos. 16, 18, 21, 25, 27, 28, 29, 36 |

III群 變質火山岩類・安山岩2つの第1ピーク No.2

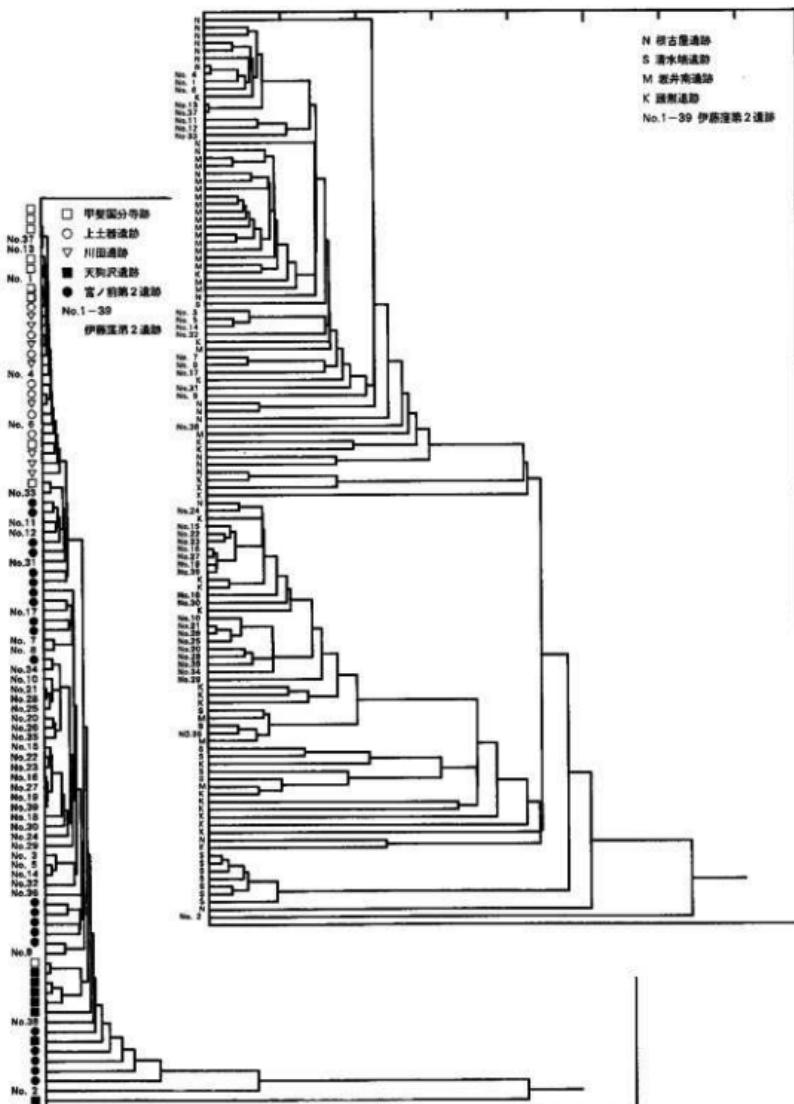


第23図 岩石組成折れ線グラフ



第24図 伊藤塚第2遺跡土器と河川砂の樹形図

第25図 伊藤産第2遺跡および周辺縄文遺跡出土土器の樹形図



第26図 伊藤庭第2遺跡土器と山梨県内出土瓦の樹形図

b. クラスター分析による分類

1) 河川砂との比較（第24図）

甲府盆地の河川砂（河西, 1989）および八ヶ岳周辺地域の河川砂（河西ほか, 1989）と比較した。Nos. 1, 4, 6, 13, 37は、笛吹川河川砂と類似性が高い。Nos. 11, 12, 31, 33, 38は、釜無川・笛吹川河川砂と類似性が高い。Nos. 3, 5, 7, 8, 9, 14, 17, 32は、荒川（長澤橋地点）河川砂と類似性がある。Nos. 10, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 30, 34, 35, 39は、八ヶ岳山麓河川砂と類似性が高い。Nos. 29, 36は、塩川（須玉川）河川砂と類似性が高い。No. 2は、塩川（須玉町東向地点）河川砂と類似性がある。なお本遺跡試料は新第三系分布地域、釜無川の主体部分、および塩川本流河川砂などとは類似性が乏しい。

2) 周辺の縄文遺跡との比較（第25図）

八ヶ岳山麓とその周辺地域に分布する根古屋遺跡・清水端遺跡・坂井南遺跡（注2）・頭無遺跡の胎土分析結果（河西ほか, 1989）と比較した。Nos. 1, 3～9, 11～14, 17, 31～33, 37, 38は、根古屋・坂井南遺跡の大部分と頭無遺跡の一部と同一のクラスターを構成している。これらの根古屋遺跡試料のほとんどが釜無川地域で在地的と推定された土器である。Nos. 10, 15, 16, 18～30, 34～36, 39は、頭無遺跡の一部と清水端・坂井南遺跡の少數と同一クラスターを形成している。このうち頭無遺跡試料は八ヶ岳山麓地域で在地的土器と推定されている。No. 2は、他試料と類似性にきわめて乏しい。なお茅ヶ岳山麓から塩川地域で在地的と推定された清水端遺跡の多数試料は独自のクラスターを構成していることから本遺跡試料との類似性は低いといえる。

3) 甲府盆地出土の瓦試料との比較（第26図）

甲斐国分寺跡（東八代郡一宮町）、上土器遺跡・川田遺跡（甲府市）、天狗沢遺跡（中巨摩郡敷島町）、および宮ノ前第2遺跡（韮崎市）の出土瓦の胎土分析結果（河西, 1990a, b, 1991）と比較する。樹形図を第26図に示すが、分類しにくい樹形図である。Nos. 1, 4, 6, 13, 37は、甲斐国分寺・上土器遺跡・川田遺跡などの出土瓦試料との類似性が高い。Nos. 11, 12, 31は宮ノ前第2遺跡との類似性が高い。No. 33は甲斐国分寺遺跡試料（No. 8）と類似するが、Nos. 11, 12, 31とともに宮ノ前第2遺跡瓦との類似性もある。これらとは別にNos. 3, 5, 7～10, 14～30, 32, 34～36, 39は、宮ノ前第2遺跡試料と一群のクラスターを形成する。そのほかNo. 2とNo. 38とがそれぞれ単独で融合している。伊藤庄第2遺跡試料と天狗沢遺跡の瓦試料とは類似性が乏しい傾向がある。

7 土器の産地推定

花崗岩類が顯著な第1ピークを示すIa群（Nos. 1, 4, 6, 13, 37）は笛吹川河川砂との類似性が高く、かつ甲府盆地東半部で製作された甲斐国分寺・上土器遺跡・川田遺跡出土瓦との類似性も高い。これらのことからIa群土器は、甲府盆地東部の笛吹川流域が有力な産地候補地として推定される。しかしIa群土器は坂井南・根古屋遺跡の縄文土器との類似性がみられ、釜無川や塩川上流に花崗岩類が分布していることなどから、笛吹川以外の釜無川・塩川上流地域を含めた他地域の花崗岩類の岩体周辺地域にも産地が推定される。

I b1・I c群を構成するNos. 3, 5, 7, 8, 9, 14, 17, 32は、荒川（長澤橋）の河川砂あるいは釜無川に産地推定された根古屋・坂井南遺跡の縄文土器と類似性がある。またこのうちNo.9は釜無川・荒川地域に産地推定された宮ノ前第2遺跡I群土器と、その他は塩川・荒川地域に産地推定された宮ノ前第2遺跡IV・V群土器と融合する。荒川河川砂のうち御岳昇仙峠岩体内に位置する長澤橋地点はデイサイトに比べ花崗岩類が卓越する。しかし敷島町牛寸付近を扇頂とする荒川扇状地から笛吹川合流点付近にかけての荒川河川砂はデイサイト・花崗岩類が同等程度含まれており、第24図でもこれらの土器との類似性はあまり高くなかった。しかし花崗岩類・デイサイトを多く含む地域は黒富士火山周辺地域であることから、これらの土器は荒川・塩川地域を中心に釜無川を含めた地域に産地が推定される。また同様の組成をもつ他地域の可能性もある。

Nos. 11, 12, 31は、釜無川・笛吹川（重川）の河川砂と類似し、釜無川に産地推定された根古屋・坂井南遺跡の縄文土器、釜無川・荒川・塩川地域に産地推定された宮ノ前第2遺跡I群土器と類似することから、釜無川を中心として、荒川・塩川・笛吹川（重川）地域にも産地の可能性があると推定される。

No.33は、釜無川・笛吹川（重川）の河川砂と類似し、釜無川に産地推定された根古屋・坂井南遺跡の縄文土器、および甲斐国分寺遺跡瓦試料（No.8）と融合することから、釜無川・笛吹川（重川）地域に産地が推定される。

No.38は、河川砂あるいは他遺跡土器との比較では特定の試料との融合が見られない。しかし折れ線グラフでI b2群に分類された他試料（Nos. 31, 33）は釜無川・笛吹川・荒川などの地域に産地推定されていることから、本試料もほぼ同様の地域に産地が推定される。

安山岩が第1ピークをもつことで特徴付けられる折れ線グラフ分類II群は、第2・第3ピークの順位を重視してII a・II b群に細分されたが、クラスター分析ではピークの順位よりも各鉱物の占有率を重視した分類となっている。これらのII群土器は、八ヶ岳南麓河川砂や須玉川河川砂と類似性が高い。また頭無遺跡において在地的と推定された土器群と類似性が高いこと、さらに主に両輝石が多く角閃石・カンラン石を伴う重鉱物組成を示す点で韭崎台地上の坂井南遺跡（山下, 1988）の古墳時代住居址中土壤試料の重鉱物組成（パリノ・サーヴェイ, 1988）と一致していることなどから、II群土器の産地は八ヶ岳南麓地域あるいは他の安山岩分布地域に推定される。しかしほとんどのII群土器は、花崗岩類・デイサイトを伴う点で本来の八ヶ岳南麓地域の河川砂組成と若干異なる。花崗岩類・デイサイトは釜無川・笛吹川・塩川・荒川流域の堆積物中に認められるが、これらの河川砂とII群土器との類似性は低くない。しかし本遺跡は、八ヶ岳南麓の延長部である韭崎台地上に立地し、塩川・釜無川にもさわめて近い地理的条件をもっている。また韭崎岩屑堆積物中にはデイサイトのブロックが露出している部分があること、宮ノ前第2遺跡の瓦胎土とも類似していることから、II群土器は在地的な組成を有する土器群として理解される。ただし坂井遺跡縄文時代中期土器の多くは花崗岩類の多い組成を示し、本遺跡II群土器のように安山岩が優勢な試料はわずかであり傾向を異にする。

No.2は変質火山岩類を伴うことから伊藤産第2遺跡出土の他試料とは区別して分類された。し

かしNo.2の変質火山岩類は新第三系分布地域を特徴づける緑色変質した火山岩類ではない。河川砂との比較では塩川(S17地点:須玉町東向)と類似性が示されている。折れ線パターンが一致するわけではないが、産地の候補地として塩川地域を推定することが可能である。またNo.2は、変質火山岩類を除くと安山岩が多く花崗岩類・ディサイトを伴うことから、II群上器と同様に八ヶ岳山麓を中心とする地域に産地が推定される在地的な土器と考えられる。

8 S字状口縁台付甕について

Nos. 3,5,12,14がS字状口縁台付甕(以下S字甕)である。これらのS字甕は、他の土器よりもやや砂粒子を多く含有し、どの試料でも石英・カリ長石・斜長石・花崗岩類が多く含まれることが共通する。しかしNos. 3,5,14が安山岩・ディサイトを伴うのに対し、No.12は泥岩を含む点がやや異なる。このためクラスター分析においてNos. 3,5,14は常に類似性が高く示されるが、No.12はやや離れて位置している。重鉱物組成では4試料とも黒雲母・角閃石が多く単斜輝石を伴う点で共通するが、酸化角閃石・斜方輝石の含有については試料ごとに異なる。前述の産地推定でNos. 3,5,14は荒川・塩川を中心に釜無川を含めた地域に、No.12は釜無川を中心として荒川・塩川・笛吹川(重川)地域にそれぞれ推定されている。岩石鉱物組成が共通性に富むことはS字甕製作上の齊一性・規則性を示しているかもしれない。

愛知県下ではS字甕が大量に出土しており、近年増加した胎土分析例から、S字甕胎土の特異性が指摘されている(神谷, 1989; 矢作ほか, 1990; 赤堺, 1990; 永草, 1991)。廻間遺跡でのS字甕は、黒雲母・角閃石・ザクロ石の多い重鉱物組成で特徴づけられる。分析方法が異なり単純な比較はできないが、本遺跡のS字甕は、黒雲母・角閃石が多い点で愛知のS字甕と共通する。しかしおよびザクロ石がほとんど計数されないこと、角閃石に対する輝石の割合が本遺跡の方が高いことなど細部においては一致しているとはいえない。また廻間Ⅲ期になると胎土選定の緻密性が崩れ、濃尾平野在地産の土器に普遍的に見られる両輝石を主体とする一群のS字甕が出現するとされているが、本遺跡のS字甕は、廻間Ⅲ期の両輝石主体の土器ほど輝石含有率が高くない。

S字甕は特殊な原料で製作されたと考えられている(赤堺, 1990; 永草, 1991)。その原料は花崗岩類に由来するものと推定される。これらの原料は、花崗岩類が広く分布する山梨県下でも得られる可能性がある。またS字甕分布の東山道ルート(赤堺, 1990)にそった東濃~伊那谷地域、あるいは松本地域にも花崗岩類の分布が知られている。胎土分析例が少ない現状では早急な結論はだせないが、伊藤庭第2遺跡周辺の河川砂組成との類似性から県内で生産された可能性がある反面、県外の花崗岩類地域からのS字甕の搬入の可能も残される。

甲府盆地のS字甕は、南部~東部地域では在地化したものが多く、蘷崎地域を含む盆地北部~西部地域では在地化したもの外に古段階のもの(S字甕A類)が多いとされており(小林, 1991)。坂井南遺跡では複数の住居址に粘土の検出例が報告されている(山下, 1988)。これらの粘土の重鉱物組成は土器内に充填していた埋積土よりも角閃石・黒雲母に富む傾向が認められる(パリノ・サーヴェイ, 1988)。住居址内から出土している状況からこれらの粘土に人为作用がある

よんでいる可能性が高いであろう。両輝石に富みカソラン石・角閃石を伴う埋積土の重鉱物組成は蘿崎台地上の表土層の一般的な組成と一致するものと推定される。粘土試料は埋積土の重鉱物組成の特徴を備えながら角閃石・黒雲母が多いことから、これらの組成を有する粘土を他所から採取した可能性もあるが、角閃石・黒雲母が多く含む粘土と在地の粘土とを混合した可能性も想定される。S字窯その他の土師器とこれらの粘土は類似点もあるが一致しているともいえない。粘土と土器製作に関しては、さまざまな推測が可能だが、発掘調査においても明言されておらず、今後の課題としたい。この問題も含め今回分析試料が在地化した土器胎土の特徴であるのか、盆地南部～東部地域と北部～西部地域でS字窯胎土に差があるのか、あるいは濃尾平野からの搬入品との胎土組成の違いがどうなのか、今後検討していく必要がある。

9 繩文土器と土師器の産地の違い

縄文土器は、安山岩主体の胎土が多い傾向が明らかであり、これは土師器が花崗岩類を多く含むのと対照的である。これらの縄文土器は頭無遺跡において在地的な土器と類似性が高く、釜無川沿いの根古屋遺跡や茅ヶ岳山麓の清水端遺跡などにおける在地的土器との類似性は乏しい。また八ヶ岳山麓の蛭神遺跡・大和田第3遺跡の在地的な胎土とも類似性が高い（河西, 1990c）。これらのこととは、本遺跡が立地する蘿崎台地が地形・地質的に八ヶ岳南麓の延長であるとともに、Ⅱ群土器が在地的土器であることを示している。従来八ヶ岳山麓とその周辺地域の縄文遺跡では在地性土器および搬入土器がどの遺跡でも検出されており、伊藤庵第2遺跡でも同様の傾向が示された。しかし搬入土器の割合は今回の場合やや少ない。

さて本遺跡Ⅱ群が細分されたⅡa群には曾利Ⅱ式土器が、またⅡb群には曾利Ⅲ/Ⅳ式が多く含まれる傾向が認められる。同一遺跡から出土した在地的と推定される時期の異なる土器において胎土に微妙な差が存在し、かつそれぞれ同一型式内の土器は類似性が高いということは興味深い。各時期において胎土を含めた製作技術が規則性をもっていた可能性があるかもしれない。

本遺跡Nos. 2,10の土師器は多くの縄文土器と同様に在地的組成を示す。蘿崎台地でNos. 2,10以外の土師器の胎土組成を得るには、原材料あるいは完成土器の搬入が必要である。その移動の最少範囲を河川砂との対応関係から見ると、釜無川・塙川・荒川が含まれる律令時代の巨摩郡の範囲内でまかなえる可能性がある。これは宮ノ前第2遺跡出土の奈良時代瓦の推定産地と同様な範囲でもある。だがこれらには多様な地質条件が当地域に存在するという偶然性が作用している可能性があり、今後他地域の分析例との比較によって検討していく必要があろう。

以上、同一地点出土土器においても時代あるいは時期ごとに胎土組成の違いが存在することがわかった。時期ごとの歴史を考察するための基礎試料として分析例を蓄積していきたい。

10 まとめ

本遺跡出土土器を岩石学的手法で分析した岩石組成に基づき折れ線グラフ・クラスター分析によって分類した。その結果、縄文土器のほとんどは安山岩を多く含み在地的な土器と推定される。さらに曾利Ⅱ式はⅡa群に、曾利Ⅲ／Ⅳ式はⅡb群に多く含まれ、時期（型式）の違いで胎土組成が微妙に異なる傾向が認められる。土師器2点が在地的土器と推定される。S字状口縁台付甕を含めほとんどの土師器は、花崗岩類の含有で特徴づけられ、垂崎台地上へ原材料あるいは完成土器として搬入されたものと推定される。周辺の釜無川・塩川・荒川などの地域に土師器の産地推定が可能だが、さらに他地域からの搬入の可能性も検討する必要がある。

〔付 記〕 縄文土器の型式分類は山梨文化財研究所の櫛原功一氏にご教示いただきました。

- 注1 樹形図は、非類似度をユーリッド平方距離で定義した最短距離法クラスター分析による。
注2 山下孝司（1984）『山梨県垂崎市坂井南遺跡』。垂崎市教育委員会。

文献

- 赤堀次郎編（1990）『週間遺跡』。愛知県埋蔵文化財センター、153P.
神谷友和（1989）S字状口縁台付甕の胎土分析。『町田遺跡』、愛知県埋蔵文化財センター、32-43.
河西 学（1988）坂井南遺跡出土の織石について。『坂井南』、垂崎市教育委員会、176-181.
河西 学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成－土器胎土分析のための基礎データー。山梨県考古学論集、Ⅱ、505-523.
河西 学（1990a）岩石学的手法による天狗沢瓦窯址瓦の胎土分析。『天狗沢瓦窯跡』、敷島町教育委員会、106-114.
河西 学（1990b）甲斐国分寺遺跡出土瓦の胎土分析。『甲斐国分寺跡』、一宮町教育委員会、41-48.
河西 学（1990c）大和田第3遺跡出土縄文土器の胎土分析。『大和田第3遺跡』、北巨摩郡大泉村教育委員会、19-29.
河西 学（1991）宮ノ前第2遺跡出土瓦の胎土分析。『宮ノ前第2遺跡北堂地遺跡』、垂崎市教育委員会、84-90.
河西 学・櫛原功一・大村昭三（1989）八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析。
山梨文化財研究所研究報告、1、1-64.
小林健二（1991）甲府盆地におけるS字甕の定着について。古文化談叢、26、151-166.
甲府盆地第四紀研究グループ（1969）八ヶ岳南麓の地質。地質学雑誌、75、400-416.
森勇一・永草康次・福真美子・神谷友和（1989）尾張地方を中心とした土器胎土の地域性について。日本文化財科学会要旨集、42-43.
パリノ・サーヴェイ（1988）坂井南遺跡試料花粉分析・材同定・重鉱物分析・粒度分布および種子同定報告。
『坂井南』、垂崎市教育委員会。
矢作健二・橋本真紀夫・赤堀次郎（1990）東海地域における弥生時代の土器の胎土分析。日本文化財科学会要旨集、24-25.
山下孝司（1988）『坂井南』。垂崎市教育委員会。

VII まとめ

今回の調査で発見された遺構と遺物は、これまで見てきたように古墳時代前期の竪穴住居址2軒、中世の地下式土壙3基、土坑1基、溝状遺構1条、ピット群が検出され、縄文時代中期の土器・石器、古墳時代前期の土器、中世の土器等が採集された。以下に気の付いた点を上げまとめとしておきたい。

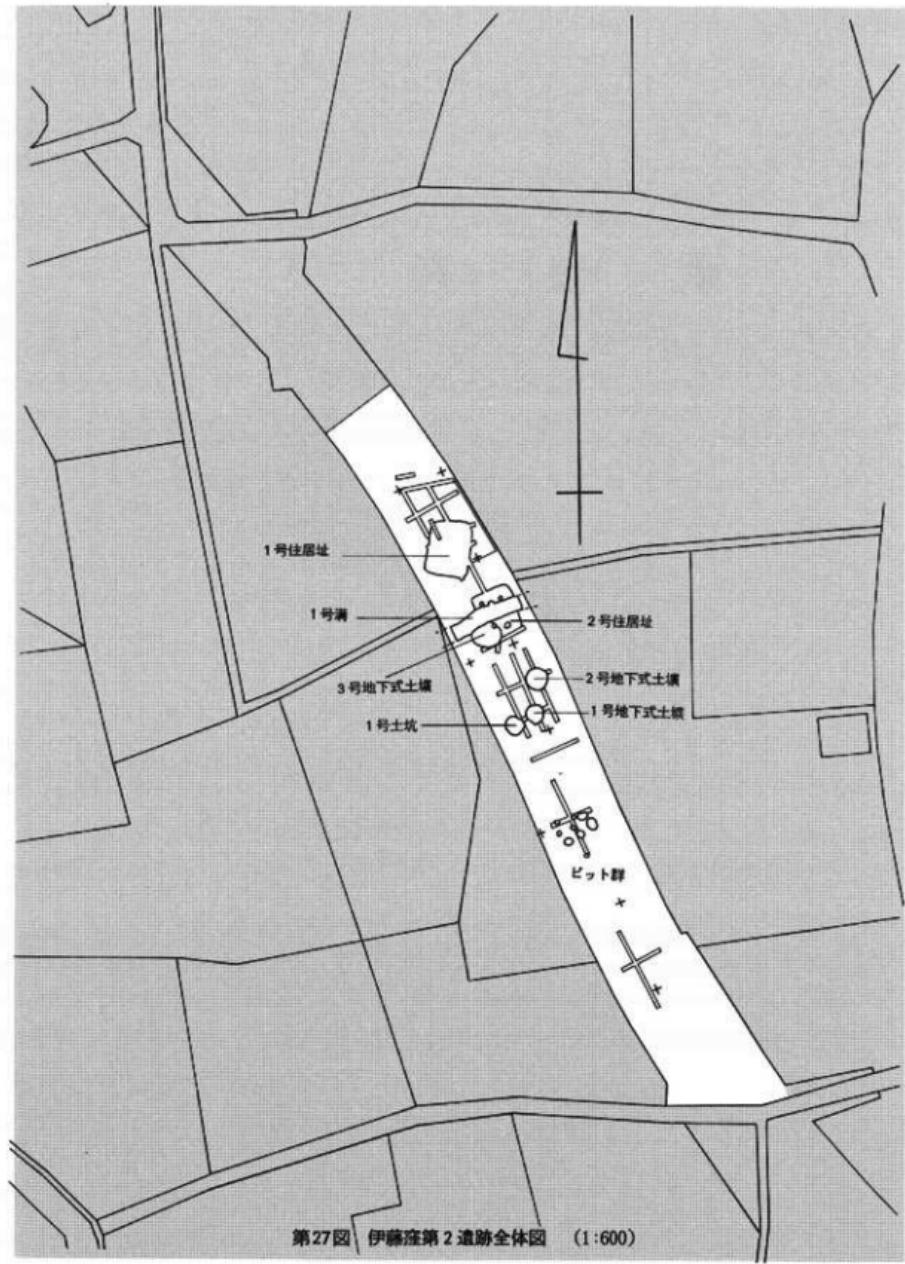
調査区域は丘の西端に位置しており、非常に限られた範囲の発掘調査であるが、古墳時代前期の竪穴住居址が発見されたことは、東側に当該時期の遺構が広がっている可能性を示すものであろう。縄文土器の出土もやはり東側に遺跡の存在を窺わせるものである。今後周辺地域の慎重な調査が望まれる。

中世の地下式土壙が検出された土器等が採集されたことは、当該時期の人間の営みを感じさせるものである。地下式土壙は墓壙等と考えられているが、性格等は現在のところ推測の域を出ておらず、多くの資料の蓄積の中で本遺跡のものも考究されるべきであろう。また、本遺跡の北西400mには能見城がある。能見城は中世の城郭であり、武田勝頼の新府遷都並びに、徳川氏と北条氏が争った天正壬午の戦いにかかわる貴重な遺跡であり、遺跡を含めた当該地域は中世における重要な場所であったと言えよう。

岩石学的手法で分析された本遺跡出土の土器は、縄文土器は在地性が強く、古墳時代前期のS字状口縁台付甕を主体とした土師器は搬入土器と推測される結果が導かれた。縄文土器は在地で購われた可能性を示唆するものであるが、S字状口縁台付甕の分布は古墳文化波及の指標となる土器であり、搬入品か在地で作られたものかによって当時の社会状況の意味合いが異なってくる。今回の分析は古墳時代の土器では始めての成果であり、土器の製作技法だけではなく、今後胎土分析による他地域の資料の増加が待たれるところである。

おわりに

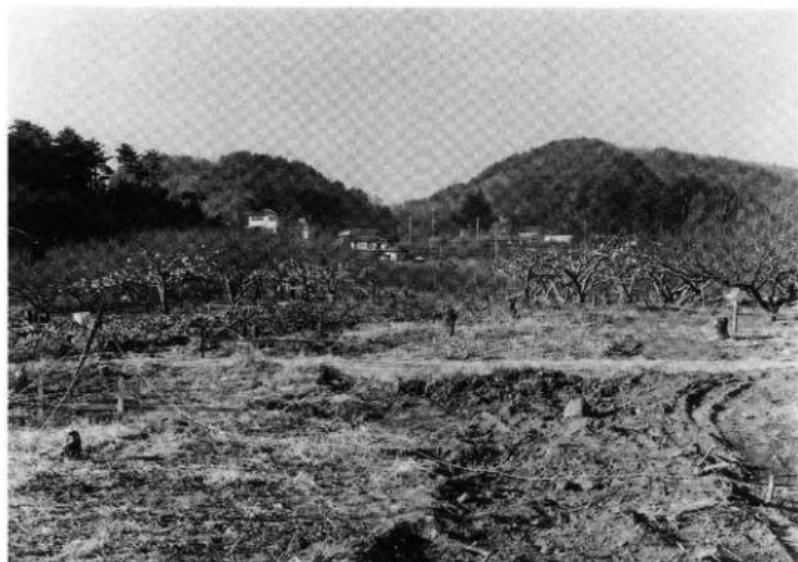
今回の発掘調査では、発見された遺構と遺物が比較的少ないにもかかわらず貴重な資料が待られ、まとめてみたように地域の歴史・文化を考究する上で重要な問題を提起してくれている。時間的制約のために資料の考察検討が十分に行えなかった点は否めないところであるが、本報告が今後の調査研究に役立つことを願う次第である。



第27図 伊藤庄第2遺跡全体図 (1:600)

写 真 図 版

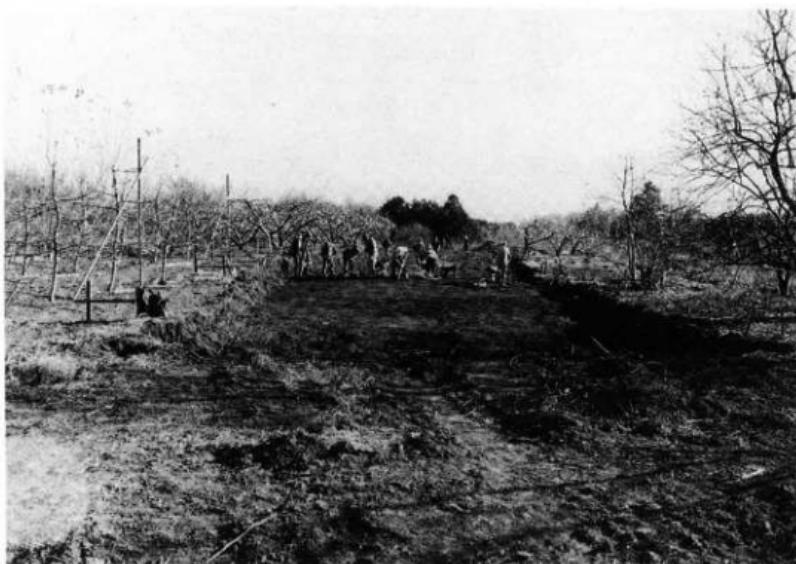
図版 1



遺跡近景（調査前）



排土作業



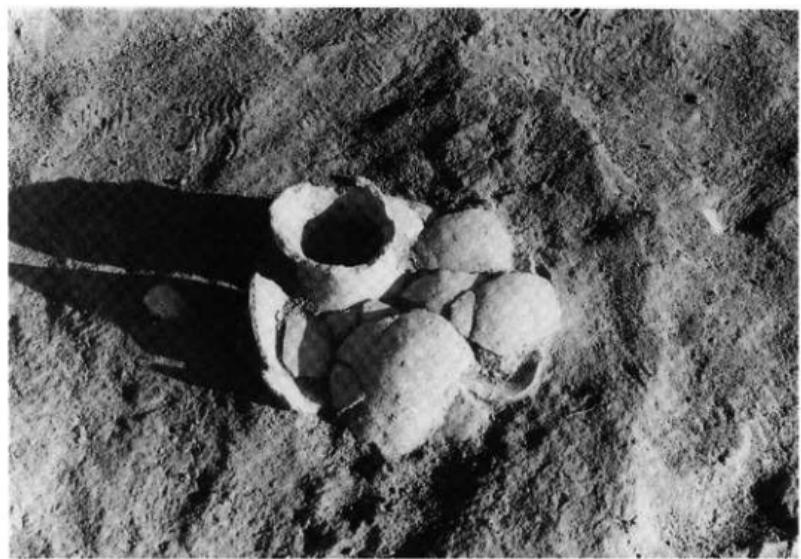
発掘風景



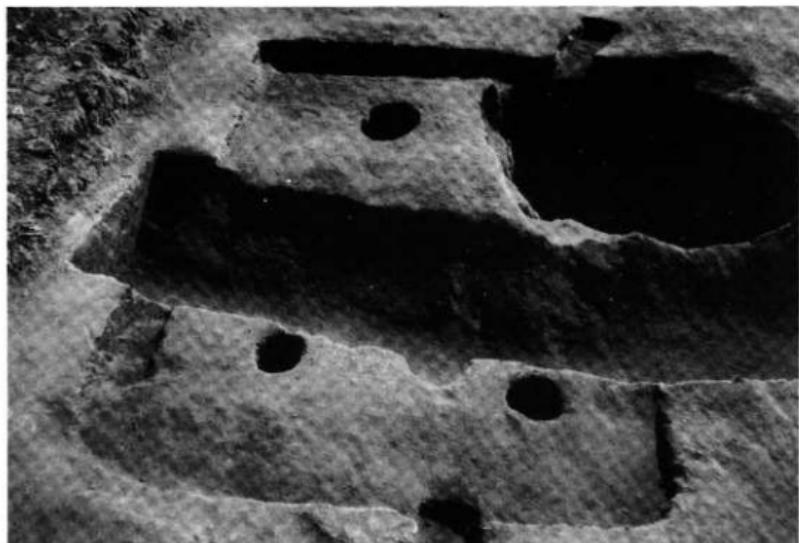
調査風景



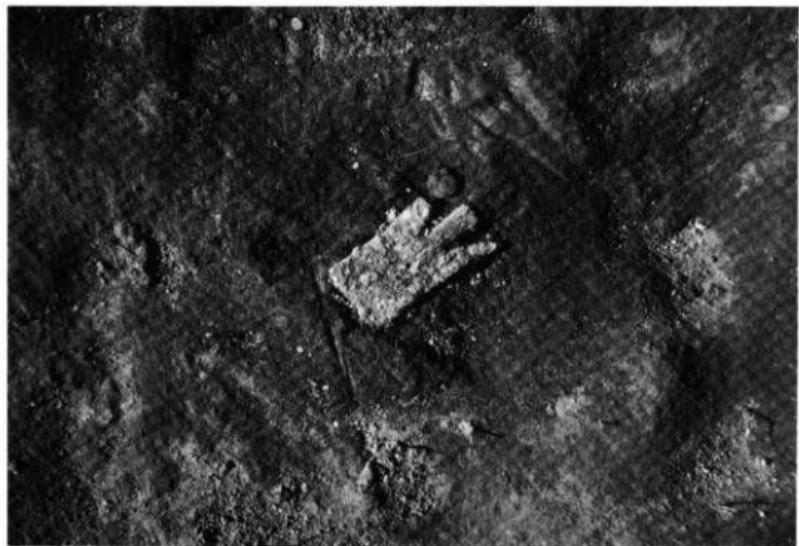
1号住居址



1号住居址遺物出土状態

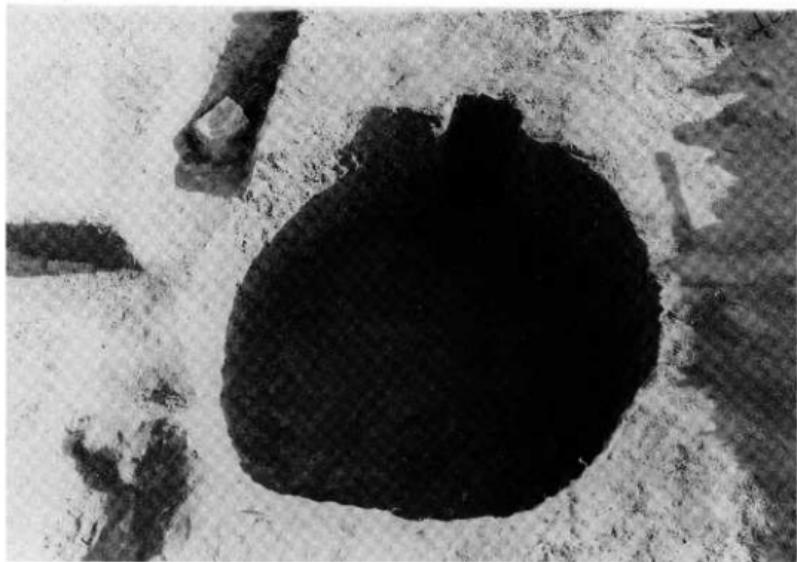


2号住居址

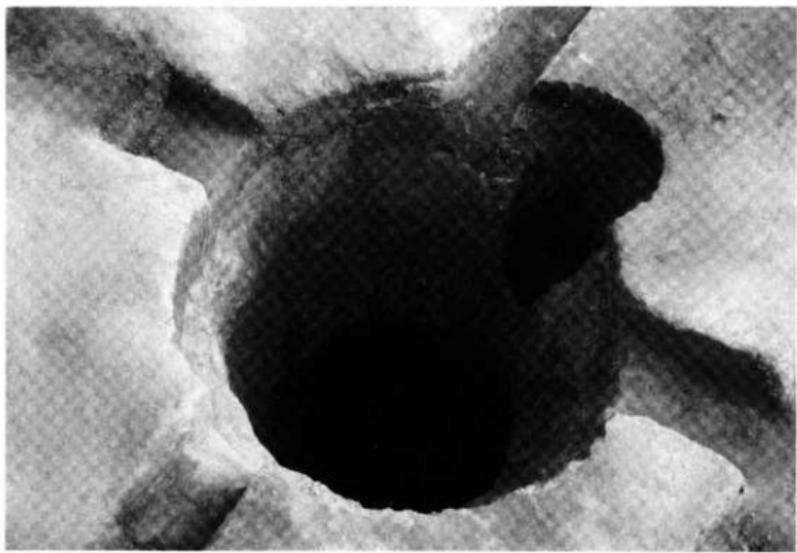


2号住居址遺物出土状態

図版 5



1号土坑



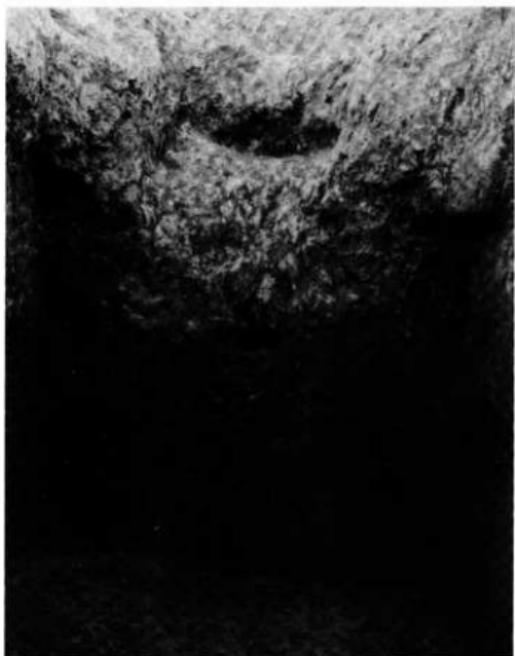
1号地下式土壤入口部



1号地下式土壤
豎坑中段部分



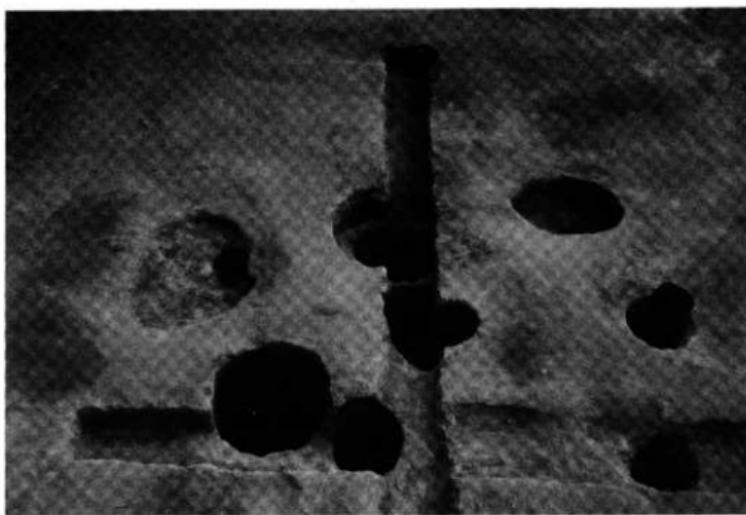
2号地下式土壤



3号地下式土壤
堅坑中段部分



3号地下式土壤
堅坑奥壁



ピット群



1号溝状遺構



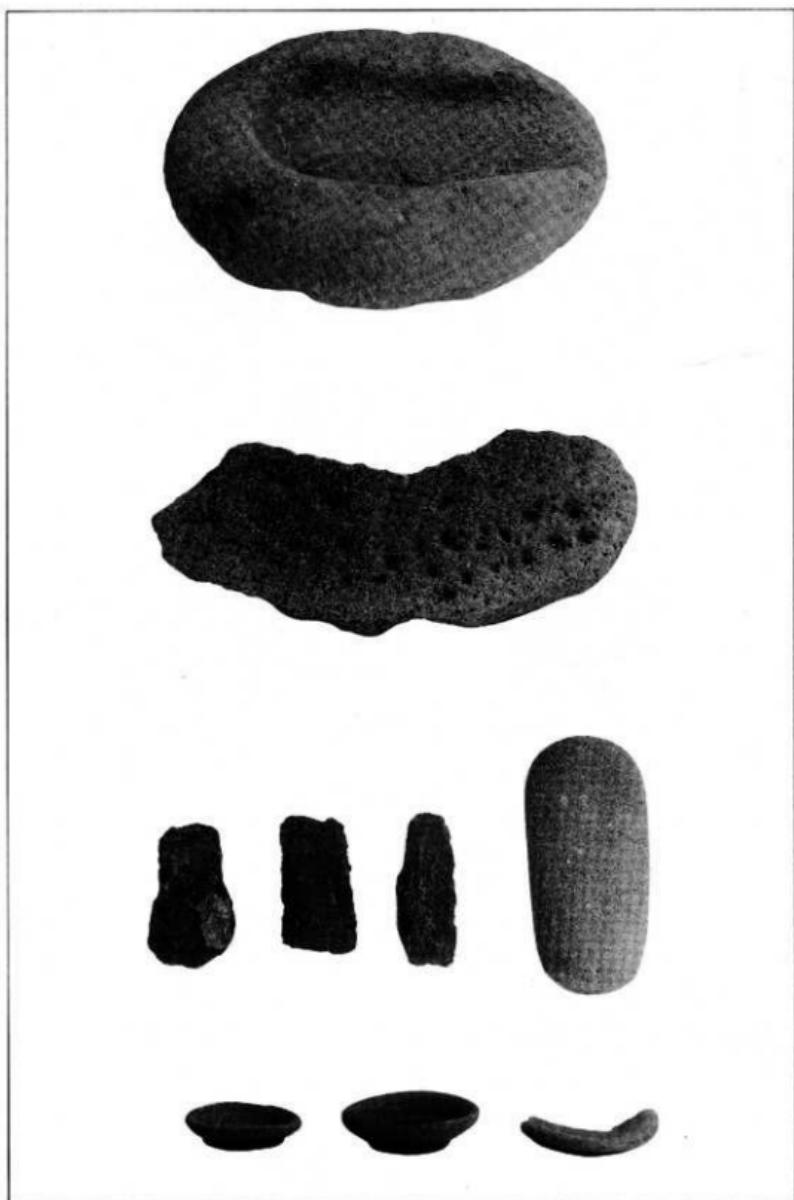
1号住居址出土遺物



2号住居址出土遺物



3号地下式土壙出土遺物



造模外出土遺物

伊藤塗第2遺跡

1991年10月31日発行

発行 莊崎市教育委員会
庄崎市遺跡調査会
〒407 山梨県庄崎市水神一丁目3-1
TEL 0551-22-1111(代)

印刷 アートプリント社
